836
209
3

# 芳草年録

堤蟻叢書

六十三

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3

ガラス使用

隄蟻叢書 六二

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3

ガラス使用

尾濤者斎藤弥九郎門人云

亥六月　島原ニ藩士尾崎濤五郎當十一日早打ニ而京師ニ作　十七日

江戸着ニ由ニ而今十八日罷越申聞ニ次第左ニ通

一　同人事當春中ニ長州ニ罷越五月十日同廿三日同廿六日當朔日都合四度攘夷ニ節草莽細ニ加リ事傳ヘシ居ニ所一應右ニ事京師ニ同志並江戸表ニも為知ニ度此段長州侯ニ相願ニ度幸此度京都ニ為御守衛有志ニ者多人數并鉄砲組大隊ニ備ヘ高人其外大砲野戦砲ニ船ニ而京都ニ為差登相成ニ間同括居下リ括所賊ニ下獨兩侯ニ曾見被仰付所意有ニ而是近骨折大儀ニ而我ニ存意ハ兼ニ承知ニ通何處近も敵慮を貫徹し　天朝ニ盛衰を共ニし後世ニ至リ楠氏ニ忠義ニも勝れリと称せられ青史ニも生傳られ此ハ本望ニ事ニ家早我ニ家國を抛ち微ニ為ニ君王を助ケリ君迫ニ奸賊を誅し君と共ニ存也ニ覺悟ニ其方獨忠義ニ志を賞皇國ニ御為ニ所事ニ相勤ニ頼存ニ也とら仰ニ付只管落涙ニ而ニ退出

高野藏書
大阪 5.27 購求

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

當二日海上大坂ニ向ひ發出帆ゆゑ薩國之藝州領備後三原ニ為夷船を見遠藩場ニ為
至込ニ様子ニ付長州ニ船を差出し夷ニ阿州領沙路須本ニ為ニ同様ニ始末ニ付船中を
見せゆる筈事ニ無通り當七日大坂ニ着翌日致入京ニ而七日ニ攘夷ニ之事　幕府ニ不構
夷船見當り次第ニ打拂ニ可ニ列藩ニ　勅命下ゆ付同十一日同不出立早打ニ昨十七日
江戸ニ先發ゆ付不取敢此段為ニ御出ニ居出ニ可ニ御座ト

一　五月十日米國船ニ打拂のみニて格別之事無ニ先日繪図面集取ニ為ニ下ニ通ニ御座ト

一　同廿三日仏國船打拂夷船數千發打出ゆ様ニ相見ニ下ニ賊ニ人ニ負死亡ハ相
分ニ不申ゆ此方ニ為ハ人ニ負死人ニ人も無ニ之ト

一　廿六日の業院ニ船印ニ為通行いたし夷船実ハ英國ニ由ニて互ニ打合ニ因船帆
柱破裂ニ外數十發打出ト是又ニ負死亡相分ニ不申ゆ此方ニてハ人ニ負
死亡なし

一　當月朔日英夷軍艦臺場と長州船ニ為ニ無入俄ニ打合未成長州ニ庚申丸蒸
気の間を打碎ニ沸湯ニ為ニ水夫四人怪俄いたし猶百五十斤ニ砲丸を被打出ゆ
不右船ニハ八十斤丸の穴ヲ塞キゆ用意ハ有ニ之ニ得ニ百五十斤ニ穴ヲ塞キゆ用
意ハ無ニ夷船逃去ゆ後從ニ發沈没ト云ゆ事ニ外ニ負死人ニ人も無ニ之ト
無ニ移り無事ニ別取アリト

一　右ニ節家初打合ゆ間ニ夷船ニハバッテイラを海中ニ下し夷賊を無ニ移りニ而ニ様子ニ
處ニ為ニ右下ケゆ讀ヲ打切バッテイラ其艘奪取アリト

一　右戦争中町家ニ者夥敷騒動いたしゆ付出火ニ處後詰ニ人數清留アリト

一　合戦發見ニ為ニ居ト童子ニ人夷流ニ腕ヲ打ニ負れアリト

一　戦争相濟ゆる高ニ處ニ見物いたし者アリゆハ夷船逃去ト節死骸を數多海
中ニ打込ゆを見受ト申左ニハ夷船ニてハ死亡多くこの有ニ

一 五月十日初日之節ハ一日甲冑ニ而致出張ハ此三日ニハ小具足位ニ相成リ其
六日ハ後ハ常ニ服ニ襷洋卷ニ相成アト甲冑ニ而ハ働ヒ自由なし此且夷の
砲丸ハ中らぬものとて極メハ如何ハ知ラレスト
一 夷船ハ打ト百五十斤ニ破到裏玉も半ハ黒丸ニ而ハ不アリ故百姓町人
など持帰アト
一 八十斤以上ニ玉ニ落ニ而ハ夷船を貫きハ此も沈没ニ而ハ不アト推事ニ付大右カ
戦争ニ後臺場前ニ而ハ引替ニ多く相成ト
一 我国の砲ハ彼多く當リハ大方ハ其着者ニ猶後ニ横濱ト戻ハ夷船
破損ニ様子を究ル事ハ弥本通ニ無之ハ以上アト
一 我炮丸ニ彼ニ當リハ多く彼玉ニ一歩我国ニ人ニ中らぬハ全く神州ニ神
州ニ妙ニ而ハ有リと諸有志ニ留気百倍ニ而座ト

一 家初攘夷決議ニ節長州ニ炮術家中島某が申ハ夷船を打ハ高き所より
打ハ人ハ夷船ニ底を打撃ニ而ハ臺場を高き地ニ築キ立其後ニ攘夷相始一の恐
とす出リ付諸有志大ニ不承知ニ夫ハ因循臆病の説ニ直ニ実地ニ試ト方宜ハ砂地
ニ炮ヲ並居ヘ置ハ倶ニ打放し試ニ可申と申ハ中島氏頻ニ申募ハ付厳
命下リ後ニ中島ハ彼誘戦其後実地ニ而試ハ如何ハ成丈卑く居ヘ水隆と
シヤクリ玉ニて打ハ方分一ニ宜敷と相決アト
一 長州侯玉薬ハ用ニ勢要事ニて毎日打詰ニ放ニ而ハ三ヶ年分ハ大丈夫有ニ
ハ處ハ度用ひ玉薬ハ天保七年ニ製ニ而座ト其上ハ前ニ大砲玉薬ハ其ニ廣大
ニハ製造ニ相成アト蒸氣軍船とも庚申丸ニ外夷相造ニ而ハ四艘ニ而ト
一 中山侍従先頃京師ハ出奔とア唱ヒ如此節長州ニ草莽士の頭ニ如くニて在ニ
一 百姓町人も追ニ戦争ニ驚キ不申ハ長州侯ニ兵粮ハ焚出ニ而ト以前ニ町人ニ就

上も有之又強壯之者ハ一刀を帯し御手傳仕度と願出ハも有之私共之召連下小者ヲ
始メ大銃丸之飛来ハ中ニ恐もなく湯水を飲り戦士之氣を助ケ居ルト
一右朔日之戦ハ長州方六七分の負とも一ツ事ハ得ル此後ハ穴塞ハ自然ノ面次第敗
軍ハ五之為敗ニ居ル
一當四日又之打拂ハ傷利ヲ得ル熟之途中ニ荒れ之事ト
○六月六日長州出十一日大坂見
以陸便船上仕候ハ近之所ハ進ル事ハ又之昨五日九ツ時頃ヨギリス軍
艦武艘田の浦ニ来ル入下之筑長府之間菊岡村屋場より打放之蔵双方
打戦バッテイラ八艘之大間をのせ百人計り来ル辺菊岡村磯際寄数度打
放ル内苅屋村出火六七軒斗焼失夷人武三人上陸之處地方之人皆ニ引取之相
成ルト何故ハ相分ニ居ルト

一田の浦ニハ船より使ヲ立此度長州ハ戦ヲ始ル付軍艦差向中ト豊前地方之妨ヲ
致ル事ハ安心ニ成旨ヲ出ル事カ十書之認帰ハ由小倉ハ門司浦屋場人数
操出ハ座ト長州人数凡六七十人斗も門司浦ニ上陸仕ル日着方夷船出帆上方ニ帰リ
申ト誠之大変ハ来ル事ニ候ル
一中山殿ハ三四日下之関ニ御逗留之處去ル朔日来船ニて浪人呂連ハ飯京相成申ト
一長州ハ久留米ニ先日大番頭西司信濃ハ人等昨日帰リ申ト浪人三四十人
も連帰ト噂承申ト
右之通荒増陸早便ヲ以御注進申上ト
○追啓申上ト熟之昨五日之戦別紙之通ハ座ト猶又今六日之戦ハ長州方大勝
利之内只今近ハ小倉勢接けふ事ハ故長州方大勝之為夷人ハ小倉を先之
征伐ハ致趣ニ為厳度掛合ニ相成ル處武備整ハ敵砲ニ致兼ル間何

辛大砲五十挺備置ニ而度々打入相成候處右ニ而長州方之人數ヲ以傷之候段
義ニ付右ニ付小倉より細川家へ加勢相頼候得共相成らす小倉海岸一ノ手ニ引受ニ而傷ハ
何時之人數探出候而自ら小倉方大ニ迷惑いたし有馬家ニ而相成候而長州家ニ
大砲備置候而相成候ニ付今ニ而白ニ戦を長州小倉之一段相成候故是又大敗軍ニ相成
之様ニ小倉方ニハ只今迄攘夷之儀を承り候様ニ相見へ海岸備一向ニ不致
内ニ而有之候處長州より右様之次第相成候得共追而武備相整候様ニ有之
私之申上候而押渡り様子ニ而有之候

五月十日同十三日同廿六日六月朔日同廿日

異國船一件御届一条

文久三亥年五月廿六日

一 外國船掛り當月晦日松平豊前守様より二条御所御附家来を以左之通御届
差出候ニ付写取差上申候

口上覺

昨十日夕異國船壱艘上筋より長府領海田浦沖致繫船候ニ付早速
問合候處亞米利加船ニ而從江戸表長崎へ罷下り候由
相答候ニ付明朝出帆之積り致候申出候而就而ハ家來共船ニ附置申候然る
處同夜四ツ半頃ニ至長州領より異國船ニ向大砲二三
發打放候得共同領陸地ニ而も四五發打放候様子ニ而其後又異船も大砲

二三聲お發ぜらるゝ案庭上前を向ふ行申ハ候ニハ當人數ハ穩便ニ
用意仕浦ニ入念ハ極ノ付候ハ領海何ニ相變候ハ當ハ夜中ニ
候ノ付聽ハ雜相分ハ此段申上ハ以上

五月十六日　名

文久三亥ノ年六月十三日

一　外國ハ國ノ月番井上河内守様ハ二本榮輔居出たゝ以ハ御書
ハ最次を以ハ居出ハ以ハ前ノ年并別紙以ハ御書ハ外ニ通書面相添ハ用
人近ハ居出ハ受領ハ置ハ首中筆ニハ

口上覺

去ル廿三日朝於長州領合炮ニ相見ヘ臺場所ニハ大炮お發ハ以年号義
異國蒸氣船ニ舟艘上前ハ後來致ハ然ハ以同領臺場ニハ大

炮放發ハ拭ハ以下前向ふ行申ハ何ニ船ニハ哉雰深ニ聽ハ雜お分ハ
一　昨廿六日ニ朝異國蒸氣船ニ舟艘下前ハ後來領海通船仕ハ然ハ家も州
領内ノ首脇ハ大炮一聲お發右異船ハも合砲一聲お發ハ同領亀山
臺場ハも又ニ一聲お發夫ハ臺場於不ニ請徒改發放右異船
領海内ノ浦沖ふ行ハ以同領檀の浦松谷前内ハ浦ハ四ヶ所
臺場ハ大砲數發ハ拭ハ内異國船ハも右臺場ニハ向發炮
仕直ニ上前を向ふ行ハ候ニハ兼ル付置ハ防御ハ當ニ人
數ニ都度ニ相備ニ下以領海何ニ相變候ハ無ハ何ニ
ニ船ニハ哉炮燈強聽ハ雜相分ハ此段申上ハ以上

五月廿七日　名

先月廿四日松平大膳大夫様ハ國許毛利左京亮様ハ在家表

公大膳大夫在府表ニ而御使者接遇之儀ニ付別紙書付之通ニ而作
入候付役人共応対仕候紙書付之通御返答ニ而述候処右御使者
御聞之趣旅宿ニ而当地紙書状之通差出別段ニ候
在府表ニ而被下不容易儀ニ付右書付写之通申渡候段
申上置候以上

六月十三日　　　　　　　　　　二木棠浦
小笠原大膳大夫家来

松平大膳大夫殿毛利右京亮殿ゟ御使者を以差出候書写

五月十日攘夷期限之御沙汰右ニ付臺場等御出来之次第
秘密通り蘇炮発候上ハ差向候ニ付如何之御座候哉

一 攘夷之御策救援ハ相成候も御都合一の仕況
皇国之御為当節ニ付而ハ何分之儀相成申ヘく候哉

一 合衆国之蒸気船嶋鳴境鼻湊ゟ大里葛葉梶ヶ鼻速戸ホ
ニ而異船見掛候處右船へ大炮三発打懸候合図有之候ニ付
之儀者御先ニ而異船打払候共其儀如何之御座候哉

一 攘夷之儀者御策遣却之御都合共御手薄ニ付　京都ゟ
御達不仕候ニ付不相済儀ニ存候

一 異船通行之節一方海岸ゟ而已打払候而者御手当
節ニ茂懸候ニ付無先之儀雖該関係之領地ニ而者甚難
計存候ニ付御尋申上置候

右之ケ条其意ニ茂皇国対向之御為御取計ニ付双方別ニ混乱之事
無之様御熟談申上度其表ニ而者急度御引受御覧可被下候
委細之儀御使者口上ニ而申上候以上

五月廿四日

大膳大夫方ハ以道答書寫

五月十日攘夷期限ニ付海内右ニ拒絶期限ニ相心得ト
於又以談判中家来ニ至迄無煤ニ激ニ不業無ニ様ニ
仰出者ニ夢ニ付於其方不致炮發ニ事ニ以来ト

一 救援ニ夢ニ右ニ准ト申去ニ此ニ領自然危ニ事ハ人数美出ト夫
勿論ニ事ニ以来ト

一 合國ニ家ニ張ニ 仰出ニ上ニ無ニ得ニ為致不申ト

一 攘夷ニ候ニ前断ニ趣意ニ付一通り通船碇泊ホニ不打拂
心得ニ以来ニ問半ニ國ニ相違ニ夢ニ一ツ事ニ 京師ニ以同ニ
ニ候ニ以後ニ次第一ツ事ニ於此方ニ先達ニ被 仰出通
将軍職是迄ニ通諸大名指揮御委任ニ為学 仰出上

者 将軍家ニ命令ニ則 叡慮ニ相心得候

一 異船通行ニ節一方海岸ニ為ニ一ニ事ニ以来ニ候無費更
候無ニ余波次第ニ前段ニ趣意ニ付於ニ領海ニ打拂ニ夢ニ
何者難ニ此方海岸ニ夢ニ猶ニ美國迄ニ打拂心得ニ付以打拂
ニ以ニ者ニ不貴ニ八相成間鋪 指存ト 警来ニ以ニ直ニ救援可
致ト

一 右ニ付以矢先ニ夢ニ成丈以断ニ度ト

此使者差異書状寫

寸楮ニ上ニ付ト 然ニ 尊藩以道答ニ條ニ付ニ乍失敬
心事及以相談以前就中 弊藩炮發以領地ト著弾ニ夢
出来以数ニ事ニ得共 此段寡君ト兼ニ入以来ニ異

度旨達候事ニ而　軍艦一切之炮発等も奉對
勅從不得止事時宜ニ寄一ニ用捨之仕様も難相成候ニ
付右之論ハ申迄も無之、尚又右之趣御沙汰被
仰入候様ニて此上猶右相違無之様何も申度候

五月廿二日

大田市之進
野村和作
生駒時三郎
磯谷謙蔵
杉本湛庵

大池金兵衛様
高橋唯之丞様
侍史

一　六月十五日

一外国船之儀ニ付當井上河内守様ニ二木栄輔差出候左之書付之由
書付写之義手ニ入候由

口上覚

昨朔日ニ於長州領合炮之相見大炮打放音ニ聞シ異国蒸
気船壱艘上関ノ海手ニ罷出、是又同領所ニ於て大炮
数発打掛候間、其方ニて乗込松平大膳大夫家来之軍
艦三艘繋留有之候脇を乗通り節、又ハ其場ニ而軍艦ニ数発打
掛ケ得共、同領海上ヘ乗通、一旦岸柳嶋脇ニ乗戻、右軍艦
脇乗通り節、赤間関并軍艦等ニ向致炮発候処、双方的中
致し候様子ニ而、得共異船之格別之損も無之候様子ニ而上関

を向き行大膳大夫軍艦三艘之内を艘格別相損ゆ哉沈没
仕櫓計相見ヨリト依て苑ヨリ付ヨリト防禦ノ手當之人數夫々相
備ヨリ領海何之相變儀無ヨリ座ト共候申上ト以上

六月二日　名

○六月十八日

一外國出獄出月番井上河内守横ニ二本栄輔居出左之ヨリ使書之
渠ト差出ト書面寫ヨリ差出ヨリ以ヨリ後ノ手ニ取ヨリ候ニ付出ト

口上覺

昨五日朝異國蒸氣船武艘上陸ト後來領海田浦沖致繫船ヨリ付早
速物見船差之ヨリ佛蘭西國旗ヲ相建居ル艘去軍艦ヲ相見ヨリ然ルニ長府領豊
場ヲ大炮打掛異船ヨリも發放發ヨリ同領前田人家燒討ヨリ義々義ヨリ座ヨリ哉出火

之様子ヲ追ヒ及大火ヨリ異人共バッテイラニ乘組領内田浦ニ三人上陸村役人共宅ニ罷越
ヨリ同不在番之役人ヲ出會致ヨリ前佛蘭西「チイウル」「フウランマン」「ホウリユ」ヲ申者之由長州ヲ是
非勝敗を決申度就右一應國豊前ニ出ヲ合申上ヲ至ヨリ次ヲ少君領ニ發砲不仕ヨリ旨申聞別紙書
面相渡尚勝敗之模様ニ寄數艘可參旨申之本船ニ引取申ヨリ不頓ヲ相手大膳大夫方ヲ重立ヨリ家
來三人兵卒凡百五十人程義召連小銃不持之者も有之領内門司浦村役人共宅ニ罷越異人之行衛
相尋ヨリ將取早本船ニ引取ヨリ候申聞ヨリ前引取申候就右苑ヨリ付ヨリト防禦手當之人數夫々相備
ヨリ尚領海何之相變儀無ヨリ座ト依之別紙書面寫相添此候申上候以上

六月六日　名

武貞填傍字

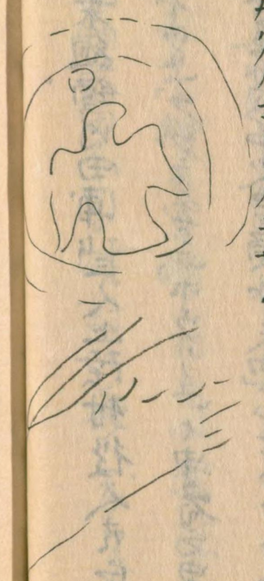
書面寫

長門州　住人

ナガトシウノスミヒトニ

佛蘭西大將提督告知被為此頃長門州殿様松平大
フランスタイシヨ、テイトクヨリ、ツゲシラサレタリ、コノゴロナカトシウノトノサマ、マツダイラダ

ゼヨレース



イセンノダイブト、モウサル、ヲダイミヤウヨリ、フランスコクノハタヲタツフ子ヲ、オウズツニ
テウタサレタルトコロ、コレヲワガクニ、タイシテ、オウイナルケイベツトゾンジテ、イマワレ、
ミギノトノサマヲ、タヽスニマヱルケレトモ、ワレニムカワズツミナキナガトシウノスミビトヲ、
マタソノツマコトモ、ウチナドモ、ウチガイスコヽロナカルユヱニ、ソノナガトシウチウノ
スミヒトニオイテワ、スコシモヲトロクニヲヨビマセズカヱリテモシナニノヨウチアリテカ、ワカフ子
ニノルヒトアラハ、モトヨリノトウリ、ムツバラフランステイコクト、ニツボンテイコクト、コンシンノシヤウ
ヤク、ムスバレシトキヨリ、イママテノトウリ、ヨクヨクコンセツニトリアツカワレルベシ、ハタマタ、
シヨクモツヲ、ワガフ子ニモツテマヱルヒトアラバ、ソウオウノ子ダンニテ、ハラワレマス、ミ
ギラヲコンシンヲモツテ、ツゲシラサル、コトカクノコトクニサムラフ、キンゲン、

ニツホン　文久三亥年六月四日

フランス　千八百六十三年七月十九日

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

○横濱新聞紙　千八百六十三年第七月廿三日　皇國文久三亥年六月四日　二十日カ

合衆國軍艦ワアイラミングと下關ニ在ル日本軍艦并臺場トノ戰爭

下ノ關ニ於テノ亜國商船ベムロツク襲ハレタル旨ノ新聞神奈川ニ聞ユルヤ否ヤ亜國軍艦ワアイラミング右亜商船ニ不礼ヲ為シタル船ヲ見ンガ為其方ニ至ル用意ヲナシ長州大名ヲ糺サンガ為ニ去ル十三日「五月廿七日」早朝當港ヲ出帆セリ右大名ハ江戸政府ノ大ニ惡ム所ナリ右ワアイラミング内海ヲ航シ北西ヨリ下ノ関港ニ入ルヲ勉タリ抑下ノ関ノ港ハ周圍ニ岡アリテ其麓北西ヨリ下ノ關ノ村アリ其村長ト云ヒ幅狹ク邑ノ後ロニ臺場ヲ列ス其數八ツ港ノ南ノ方ハ邑ニ近キ處ヨリモ水深キヲ以テ外國ノ船南岸ノ深瀬ヲ撰ミテ航海ス北方ノ岡上ニ在ル臺場ハ砲門ヲ船ノ通路ニ向ケテ備フ故ニ常路ヲ通ル船ハ彈丸免ルヿ難シ六月朔日ワアイラミング艦港ノ入口ニ近カ付ケル時其傍ニアル臺場ヨリ合圖ノ砲ヲ放テリコレヲ聞テ其他ノ臺場并港中ノ軍艦ヨリモ右ニ応セリ此時マテワアイラミング旗ヲ揚サリシカ合圖在ルニ及ヒ国旗ヲ揚ケ才日本人ノ按

西洋第七月廿三日即我六月七日我六月四日彼七月二十日也蓋有一課矣

第七月十七日

ニタガヒ北岸ニ依テ港中ニ進入セリ其時第一ノ臺場ヨリ急ニワアイヲミングニ大砲ヲ打掛外臺場
ヨリモ悉ク打出セリワアイヲミングハ急ニ進マズ臺場ヲ鎮まちスルタメニ大破裂弾ヲ臺場ニ當
リワアイヲミングノ放チタル破裂弾ヲ得タル臺場人ヨリ急ニ走リ高キヨリ飛下リタリ是ヲ以テ
見ルニ日本ノ為セル事モ大ニ功ヲ奏シ臺場大ニ損傷セルト見ユル ベムクロックニ大砲ヲ打掛タル
バルク船 船号不号 并ブリッキ船尚此処ニアリ外ニ蒸氣ランスヒールト船モアリ右船ニ邑近ク寄リ
内ニバルク船アリ次ニランソツキ外ニランスヒールト碇泊セリ右船ハ蒸氣ヲ焚ク船中許多
ノ人勢用意ヲナシワアイヲミングの来ルヲ待受タリ船将マクドウガル欲ワアイヲミングヲシテラン
スヒールドトランソツキトノ間ニアル所ニ下リ通リ受リニ左右ヘ砲ヲ放ツ用意ヲナセリ
ランソツキの船第一ニ砲ヲ放ツヲ直ニワアイヲミング両船ノ間ニ入リ来リランソツキの艫ニ一
大弾丸ヲ打込弾ノ透リテ船沈マントスルニ至レリワアイヲミングノ艦漸ク進ミ臺場并
ニ邑ニ砲ヲ打掛又船ヲウタンガ為船ヲ返サントセリ右艦ノ返スヲ見テランスヒールト動キ出シ

ワアイヲミングの通リタル海路ヲ十字ニ切リテ西方ニ走ルワアイヲミングノ返シナカラ ランスヒール
トニ大弾丸ヲ打掛此弾丸蒸氣釜ニアタレルヲ以テ船飛上リ船ノ諸所列裂ケ蒸氣器械四方ニ
散乱ス然レモ乗組ノ者直ニ疵ヲ受ザルヲ以テ水中ニ飛入リタリ ワアイヲミングノ返セル時ハ臺
場ヨリ砲ヲ放ツ事サナシ思ヒノ侭ニ事ヲ為テ神奈川ニ引返ス才七月六日午後第二時頃當
（六月四日）（昼八時）
港ニ着セリワアイヲミング戦ノ間ハ暫一時十ミニウトニシテ弾丸ヲ得ルモ十一塊即死四人手負
七人其内壱人ハ路ニテ死ス外六人ハ生死未知 仏國キンサニ艦和蘭メシサ艦亜國軍艦ノ至ラ
サル前下ノ関ニ於テ襲ハレタル事并ニ佛國アドミラール彼地ニ趣キケル事ハワアイヲミングノ乗
組ノ者當港ニ来ル迄是ヲ知ラス彼地ニ止リ仏國アトミラールノ命ヲ待タルヘシ聞ニ右亜國軍
艦ワアイヲミングノ不日再ヒ彼地ニ行クトス 或説ニ京師ニ在ル 皇帝國人ニ攘夷ノ命ヲ出シ
五ケ月中ニ其令全トウスヘキコヲ誓ヘシム依之諸大名戦争ノ用意ヲ為シ殊ニ長門ノ大守 皇
帝ノ命ニ應シ下ノ関ヲ通航スル外國船ヲ襲ヘリ右大守ハ外國船ト戦フテ此（北）スルヲ揖ハス

諸大名速ニ彼ト同盟シ外國人ト戦ハンヿヲ思ヒハナリ又云薩抄モ又異國軍艦ノ来ルヲ待テ
外大名九州四國内地南方ノ大名ト共ニ討ントスル又是ニ反シテ薩ハ和睦シテ大夫列朝ト
前ニ和親條約ヲ結ハンヿヲ欲スト右ヲ説イツレカ是ナルヤイマタ知ス過日江戸ニテ出セル日本ノ
新聞ヲ見ルニ長門ノ大守西國二艘仏郎西船一隻又壊リ其節迯タル外國人ヲ捕タリ
ト我カ前ニ云ル如ク如斯説アルヲ以テ日本ト外國ノ事弊大ニ誤レル事多シ兵器ヲ造ルヿ
國中実ニ盛ンニシテ江戸ニテ職人昼夜ヲ不ケテ急ニ造製ス

在日本和蘭コンシユルゼ子ラール館トテカラースフアンポルスプルツク氏ハ船将テカスセ
ンプロートの指揮セル和蘭軍艦メジサ下ノ関港ニ於テ襲ハレタル事并其地ノ圖
ヲ我ニ贈リ是ヲ以テ是ヲ次ニ述ヘ讀者ノ覽ニ備フ

去ル九日和蘭蒸氣軍艦メジサ「拾六挺」長崎出帆シ神奈川ニ至ンカ為メ船路ヲ周防灘
ヨリ内海ニ乗リタリ長崎ヲ出テ小距離ニシテラホントの指揮セる仏國飛脚船キニサヽ

此戦争我五月廿六日事云然十一日者十二日誤

逢右船下ノ関ノ臺場并ニ其港ニ碇泊セル西洋製ノ船二艘「日本船」ヨリ打ヲトラレタル旨
ヲ聞リ然レトモ右メジサノ船将既ニ内海ヲ航セント没シ長崎ノ隙臺ヨリ水先案内ヲ得タルヲ
以水路ヲ變ゼズ矛七月十二日ノ朝アイ島ノ近傍ニ碇泊シ日ノ出ルヲ待テ下ノ関ノ瀬戸ニ至ル此瀬
戸ニ今ヲル時臺場ノ一ハ空砲二発ヲ放ツト直ニ村ノ前ニ至ラタルブリツキ船ヨリ同空砲八
発ヲ打立ケレトモ未タ戦争ノ合図トハ知ラズブリツキ船ニ近付ニ至リテブリツキ船并ニ旗ヲ反
をハルノ船并ニ臺場ヨリメシサニ向テ大砲打ヲケタリブリツキ船「ランリツキ」弱船ヲ長門大名ノ
国旗タリ白ク一アリ一ニ三星檣ニハ旗ナシ右二艘ノ船ハ砂洲ノ後ニアリテ其所僅ニ二尋
ノ深サタリ故ニメシサ船其船ニ近寄る能ハス離ルヽヿ三丁餘ナリメシサ船戦争ノ用意
ヲ為スヤ不ロヤ臺場并船ニ向ケテ実弾丸并ニ破裂弾ヲ　其時メシサ船進ミナカ
ラ船及ヒ臺場ヨリノ不断放テル弾丸ヲサヽヘシ其臺場ハ大砲ヲ以テ備ヘラレシモノセ大体三
十四ポンド及ヒ六拇ノ破裂丸ニシテ少クトモ臺場六ツ有ルヿヲ見出セシメシサ船尤大ナル臺

場ヲ鏤(きりて)其ところ其モノ甚大ナル鉄砲八ツヲ備ヘシモノ之ガ為ニ樹木及ヒ高キ岩ニ隠レ入メル他ノ臺場ヨリメシサ艦ニ打掛メリメシサヨリ撃ツ処ノ発セル大砲ニ因テ二艘ノ船ヨリ発セル弾丸ヲ減サセシメシ然リメシサ艦丘ノ臺場ヨリ大ナル弾丸ヲ得シめ何トナレハメシサ艦下ノ園前ニ於ル四ツノ臺場ヨリ放ツ縦横ノ弾丸中ニ在テ(おりて)放ノ実丸及破裂丸ノ狙ニ一致ナルヲメテ弾丸ノ数メシサ艦ノ周圍ニカソヘ難シ故ニ無是非(ぜひ)将ニ艘ノ船ヲシツムル企ヲ休メシ其ニ艘ノ船ハ不幸余リ浅キ処ニアリシモノヤハテメシユサ艦ニ於ル所ノ臺場ノ弾丸彼ノ通ルヲノ妨メリ且メシサ艦九洲方ノ臺場人数在ルヲ疑ヒ成丈(なるたけ)手早リ不断弾丸を放シツヽ港ヲ突出セント欲シ又彼ノ蒸気ノ缶ノ螺轉及ヒ柁ヲ敵ノ大ナル弾丸ニヨツテ毀傷スルノ大害ヲ拒ノ為ニ敵砲ヲ不断防キ十カヲ除ニスヽサルヲ得シメシユサ艦一時半ノ内七箇ノ臺場ヨリ発セル大砲ノ中ニアヒト彼不沈旦即死ニ三人ノ損傷ヲ笑(哭)スルニ至(サ)セルヲ実ニ浜砲三十一箇(敵ヲ埋メリ)ノ中十七ケノ(本ノ)船躰ヲ穿(うが)チ其余ハ細具筒笈ヲ貫(別章ニ敵)キユケリ敵ヨリ三人ヲ殺シ二人ヲ傷ケシ此玉大砲指揮大ニ俟ノ水夫ヲ殺サルヽヲ免カレメリ他実丸面梶ヲ貫キ鋭(銃)架及ヒ枚司ヲナル錨ノ浮木ヲ破砕シ且二人ノ水夫ヲ甚厲シク傷ケメリ其命今甚危シ此玉カビタンミトシツブメン館(ヤシキ)トノ間ヲ過リ而人辛フシテ免ルヽヲ得シ然リ破砕木ヒノ為メニ薄手ヲ負ヘリロイテナント館メルコウ及ノシユシヽツシ子ードラッシール館モ又他ノ実丸ニ回ルノ危難ヲ辛フシテ免レ得シ此玉ハ船ヲ貫ヌケリ庁材及錨ノ浮木船中ニ飛散セシ形状ハ写シ難シ三箇ノ破裂丸甲板上ニ破裂シ十七実丸舷ヲ貫キ是ニ回ル船多クノ損傷ヲ受ケヲ考フルニ船将ノ命ニ因(リ)テ夾(ク)涼気ヲ通セシメシ是ニヨル(リ)兵士ノ働キヲ便ナラシメシ常ニ火枝ヲ行シ兵士ハ数人ニ過ス敵ノ損失ハ計リ難シ然ニ是

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　　ガラス使用

彌數ニ疑ナレ𪜈ト十レハ墓場ノ兵士甚タシレ且ツメシヒサノクレーブショウト渓房ヲ以テ作レル玉
及棚破裂丸彼ホノ方ニ居シキ働キヲ顯シ墓場ヲ手擒セシ玉ハ孫ニ市中ニ又発行ケリ乍
然敵砲ノメシヒサ討捕セレモノハ殊ニ死数テ九ツ辺ニ居ル日本船ヲ打セリ
港ノ広キ然ハ大低十二而和蘭ヤルドの廣サアリ其ヲ狭キ処ハ大低九而ヤルドス有リ

於横濱水主芳吟味之節申立次第

右申口

佛國軍艦タンケレードル号組水先案内長松申上ル船ヲ佛国軍艦セミラシース、ヲ追ヒ相進ム下ノ方
ニ八里程ヲ隔テ第四の浦江の岸ニ有ル砦ヲ大砲数発ヲ撃掛ケ其砦ヨリ之ニ応シ数発ノ大砲
長物ニ有ル之ヲ更ニ砲撃ヲ以テ故佛国の方ニ有ル砦ヨリ之ニ応シ数発ノ大砲相止セミラシースヲ
タンケレードル船の方ヲ墓場ヨリ丸二十程モ隔リ之有ル砦ヨリ丸墓場ヨリ手ヲ大砲四五発
打出シ右ニ有ル表櫓ヲ焼櫓并胴ヲ貫脇水際ヨリ都合三丸手中ヲ貫又仏船二艘ヲ敷十之敵砲
数発ヲ以長物ニ有ル外砲多打発ヲ外バッテーラニ乗多人数上陸村家ヨリ火ヲ放ケル
二三十家焼拂尚ゲウヘールヲ数十発打ヲなごうら相追ヒ有ル甲冑ヲ領掛ケ又二本
打ち槍ヲ本数ニ一同乗組シ右ヲ丸朝四ツ時ヨリ夕七ツ時迄ニ有ル村落ヲ七ヶ所迄退ケ帰
船致シ夫ヨリ一同出帆七八里程相隔テ碇泊ヲ繋ケ橋ヲ架ケ仲蔵一日ヲ経テ歩ヲ改ケ内
内通帰帆昨二日夜横濱ニ入津仕ル胴ニ有ル船ハ水際ヲ押丸村ヲ丸ハ潮水押

横ヶ木塚村　与三郎　亥十九才
伊豫國大津　菅　藏　亥三十七才

大ヶ有綱籠ニ拾ヒ初取出し老人を家セ卸シ兼ム用ヲ居ル下丸木を打込御為い
ヲ知レハ家々ニ置ク

一 船ヲ家始末船中ニ居ル本文ニ始末驚愕ノ事ニ居ル陸地ニ拾ヒ内論一体ニ
ヲ柄醜ニ覺ル申ス

一 船修復出来本月七日出帆仕ル如石炭乏敷帆家ニ為ニ遠ク御座ニ遠ク
気ニ用ヒ候ヲ居ル

右之通ニ候ト以上　六月

一云
右新聞紙ニ并水夫申立横濱無天町窓意人ヲ見来寫シ

武員云與前一所載同文異譯也

○蘭新聞紙之寫　但英人述

於日本横濱千八百六十三年七月廿一日　秋文久三亥年六月七日　新聞紙

一 日本ニ在留セル和蘭コンシユルゼ子ラール長州下ノ關ニ於テ同國軍艦
メテユサー號ノ襲ハレシ大事件ヲ予ニ報知セラルヽヲ以是レヲ人々ニ
告示セン為メ印行ス又下ノ関瀬戸ノ畧図ヲ右船長カセンゾロー从
ヨリ得テ此下ニ附載ス

一 右船内海ヲ渡航シテ神奈川ニ赴カント去ル五月廿四日長崎ヲ出帆未
タ遠カラサルニ佛國軍艦キンサン號ニ逢ヒ右船將我カ船ニ告ルニハ碇泊セル毛利家ニ
隻ノ洋船ヨリ大砲ヲ打放セリト云

一 我船司元ヨリ内海ヲ渡航スヘキ意念ナレハ長崎奉行ヨリ日本水路嚮導ヲ雇ヒ得ル
ヲ以テ海路ヲ変セス

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　ガラス使用

一 右船七月十一日早曉天明ヲ待チテ下ノ関ヲ渡航セントアイ嶋近海ニ碇泊ス

一 天明ノ後瀬戸ヲ渡航セルニ臨ミ一ノ臺場ヨリ空砲二發シ又下ノ関ノ前ニ在ルフリッキ船ヨリ空砲ハ声應發ス然レ𪜈數隻ノ日本廻船豊前ノ方ニヨリテ並列シケルヲ以テ此合圖ニテモ未タ我船ニ打放ノ意念アリトハ思ハズ

一 我船彼ノブリッキニ近寄ルヤ直チニ白旗ヲ飜シテ山上ニアル臺場ト共我船ニ打発ス

一 此時彼船旗ヲ上ケシニ長州公ノ旗ニシテ則青地ニ白ノ三星其上ニ一ノ字アリ又彼船二隻共ニ凡二尋許リノ浅瀬ニ碇泊スル故ヲ以我船三百尋ヨリ近ク寄ルヿ能ハスサレト我船彼暴虐ナルヲ以テ直チニ敵射セシ破裂 径リ四寸九トノ丸 備ヘタリ又彼地ニハ數ケ所臺場アリト知レリ

一 我船大砲ハ位備ヘタル所一大砲臺ヲ壓セリ其他ハ山斬岩或ハ樹陰等ニアリテ我船ニ打放セリ又我船ヨリ能覗ヲ定メ放チシ弾丸ハ多クニ隻ノ船ニアタリタリ

一 兼テ外国船ノ通路一定シケルヲ以テ砲臺ヨリノ放砲ハ悉ク我船ニアタリ且又下之関外面ニアル四ケ所ノ砲臺ヨリ我船ノ舳ノ方ヲ放射シケルニ悉ク船身ニ的中ス此時我船將彼ノ浅瀬ニアル二隻ノ船ヲ打沈メント思ヒシカ𪜈不幸ニメ其念ヲ失ヒヌ又此時我船ニ打放スヘキヿヲ慮リ瀬戸内ヲ走リ出ス

一 敵ヨリ我船ヘ乱射セル弾丸蒸氣ノ螺旋ハ釜舵等ニ的中セシヿヲ怕レ此大難ヲ免レカ為メ從容トメ蒸氣以テ走リツヽ絶ヘス敵陣ニ連発セリ

一 七ケ所ノ砲臺ヨリ雨射スルヿ凡西洋一時半ニ至レリ然ルニ我船幸ニ沈没ニモ及ハス唯僅ニ即死三人ハ実ニ天幸ト云ヘシ然此戦ニ依テト死亡セル者ハ實ニ悲歎ニ堪ヘストト云ヘシ

一 敵ヨリ放射セル三十一丸ノ内 十七丸ハ船身ニ中リ其餘ハ帆網檣煙筒等ニ中レリ又破裂丸三ツハ船上ニ飛来リテ破裂ス又三十七ノ弾丸ニヨツテ即死セル者

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3　ガラス使用

三人手負二人ニ及フ又同量ノ丸三ツ大砲指揮スヘキ第一等ノ者一人重傷三テ暫時
ニ死セス且コニ云ルゼネラール 此人橫濱
在留役人ノ
ヲ危ノミナラス其場ヲ遁レタリ其外両艘ニ打込ミレシ丸ハ小砲ヲ掛ル臺ヲ打砕キ其丸四
方ニ散乱セシ故破砕ノ木片飛散ニ依テ水夫二人數ケ所ニ傷ヲ負ヒ今ニモ危キ様子ナリ
又同時ニ船司及ヒ指揮官ノ両ニ弾丸発シテ二人共既ニ危急ノ所ヲ逃ルヿヲ得タリ細キ
木片飛来リテ小傷ヲ受ケタリ其他木片及雑具類ヨリ散乱セシヿハ茲ニ尽シ難シ
一破裂丸三弾ハ船上ニ発シ又十七丸ハ船ニ中リテ數所ニ損傷ヲ起シタルニ即死セル者
僅ニ四人及手負ル者五人ニ過キサルハ実ニ稀有ノヿトスヘシ
一船将怖ル、色ナク泰然トシテ命令ヲ下セリ水夫等ニ至ル迄能ク是ヲ守レリ
一長州陸軍及ヒ海軍ノ損害幾許ナルヤ知ルヿ能ハストスルモ数十人来リ集リシ処ヘ
向ヒ我船ヨリ打放セル葡萄丸或ハ径八寸ノ破裂丸數多ナレハ損傷數多ナル当然

也
一砲臺ニ向ヒ放チシ弾丸誤テ市中ニ落打込ミタリ又或ハ敵陣ヨリ我船ニ向ヒ打放セ
シ弾丸モ又誤テ傷ニ在ル日本迴船ニ中リタリ
一下ノ關瀬戸内廣キ所ノ径九千二百ヤールトナルトハ 日本三八マイル ニスキズ又最狹ナル径九百
ヤールトナルトモ向ノ見ユルモノヲ云ヒ
和蘭軍艦メチユサーノ船路及ヒ同艦日本船ヨリ放射セラレシ所ノ号ラ青地ニテ圖中ニ画キシハ
一内手ニ在ル二ツノ青色ハ下ノ関船陸近ノ碇泊セシ示ス

右等ノ戦争ハ学ヲ外ニ備ヲ出板ニテ義ニ由ラサルヲ来メタルヿヲ不ラ近日画
一ツ止ラス先ヲ争ヒ学ヲ一ツニ至下ラサルヿヲ期シ然ハ則チ我ノ称スル所ノ義ニ於テハ
能ク其義ヲ尽シ其義ヲ尽スヿ能ハサルヿヲ知ラス而シテ其義ヲ尽スヿ能ハサルヿヲ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六月朔日

○長門府中毛利左京亮様老女文通之写

四月廿九日ニも申上ハ通掛ニ日ニ心なくも五月朔日北アメリカ乗りハる下の関大合戦中ハ筆紙ニ尽し兼ハ御ゆるす船合戦アメリカ大戦大般つ艘ニて押付乗りトの事ハ本家様との合戦此度ハ大敗軍庚申丸と申船ハ打込れ大騒の処ニ而し強く海中ハ沈ミ夫々はつていらとゆる船ハのり替大合戦の刻又ニ平信丸ニ申船とも大合戦の由是も大損の由又蒸氣船も大損しニ相なりハやぐアメリカぜんしと申し其節日本の人ハ色ニとアメリカ船ニ笑ひぶやき申て乗りハ由掛ニ残念なるかほうす御本家様蒸氣船ニ湯の釜ニ鉄砲当りハ故其湯をこのひて六七人も即死故其脇ニ居ハ人ニ大分し怪我ハ屋ハ処強くたる様ハ乃ハ二日夕夜人死ハ由跡ニかし生て居ハ中平信丸とゆるハ此二日朝迄深て居ハ四ノ頃是又水中ハ沈ミハ由申上ハ三艘切ニ寝早船軍ハ出来不申るのゆる人ニ心る

られず此方様よりの陣屋場よりも打かけ候へば彼方よりも打出し中々みる目も
おそろしく御座候得共此方様にては出候人に壱人も怪我もなく千万にて大きに難
有がり申候実ニ朔日大合戦ニて御座候かりの打柄御本家様若君長門守様
御領分にても右の場所御見廻り朔日に蒸気船を御覧御遊ばし候御様子
前文の通り故に小船にては??遊ばし候所早き方より船をさし出し船退き
合戦相済の中に大変に相成上り場も早き所にて船を??より?れ??と
近習達の衛にて国へ御上り支度何事とも知らず御奉行衆と申事に
御かくみより入候小船数ほど共も御人共其上りろくと船もさしかへつき踏
込みて落候中其死波あらく候由にて人数を分りふり候て何とも存じつて
いふに思ひしに参り候ては迎へ候ゆへ何ととも?とうのより多勢死し
候ほどとても存じ候ほど支配り不申決し軍の中にて居合候ゆへ故御上へは申上に及

日に当和ホハかげ候て一日くし月日を送り候ほどにて支度にて御表の
物入は扨又此方様迄先御退に遊ばして御座候へは様へ御き候て又
御候人にては御国むきびホ色には御入多く実以不ろにて申候
右之通御様子にて一?かな心痛の所毎度との通り盗賊に追とそ候
とうし合候心中ハ一つにハ此方様の陣場よりアメリカ船乃
室に二本の打出候てアメリカ船も大きにしもへ上り支度船も急き候
やら金銀玉数をらり候中に唐船ハ別?の大筒二つ宛く迄乃候の
大きにしきをやう相見へ候と相見の人申候との中にて女?
候左程にも思い不申合図の鉄砲に?鉄砲の
音?て?にて申し心のうちハ何ととも
此都中へ出浦かやめて四五千里にも候ほど須霊院様も御?

六月五日

其山彦や峠を色々の道を御出被遊候事ニ存候此度御前御殿様ニハ山口ニ御座候ニ付
大膳様大殿様御引返ニ相成候て若殿御二方様も山の中の事ニ候ハヽ御逃遊はされ候
様ニて御引払被遊候ところ御座候様相成候ニ付御逃遊さるへく
夫ニ付御退の節ハ御家中之者共も先ニ罷出候ニ付御出陣被遊候所
家々ニ出て御馬ニ而御手廻り御供ニ而御座候御出馬ニ立退ニ相成候旨
御家中之者共ハ是ニ退と申成候由申候夫ニ付申候のを承候ハヽ[illegible]
退キ者様と色々と申候[illegible]先ニ御暮近御さ退ニ相成御座候様子ニ候
さて此上何も御様子御座候節之御屋様も[illegible]

六月五日の事

五日朝六ツ時頃ふらんす船前田辺ニ来り四十丁ほと
沖ニ海ニ船を留置向大筒を打かけ是を討殊ニ家根をさし出

浜の上ニ迄打かけ候所中々陣屋も御備ニ打かけ候所弐三丁も此方ニ而打
玉落ち居大キニ損じ山田右衛門御備之大筒丸打出シ候而退キ
相成山の方ニ十二三丁も引退き候ニ付先ニ立退の積ニ而
前田家近辺之者ハ中々大筒ニ而大合戦ニ而御備
の日向諸々火の中ニ而後ハ返り候所稲妻の如くにて中々其文
の[illegible]一里程引退き一の宮と申御宮前之方ニ而働き候
有之候文夫ニ而大合戦ニ而役人中ニも[illegible]とて大砲
大筒の音[illegible]中々紙にも[illegible]ニ而此場ニ
八里之上ニ又二里余も引取井田村ま福寺と申寺ニ而働き
候[illegible]山の中ニ而何も一ツも[illegible]
其武蔵[illegible]大合戦[illegible]

人も余程即死せしよし怪我人もありし又唐人も即死ハ無之由此者様ニハこれ
なく合戦ハなき故右之人も怪我又ハ死ハなきよし唐人へも砂利玉并ニ
も一切仕掛不申候よし田畑も荒し候唐人も恐多く存候事と申
候よし一番の砂利玉大サ先年一人位ある形ハふんどんのやうなるもの四ツ
大サたんおき位の石の泊様の様ばちばちし仕掛候由数ハ大小にて九ツ計落候
一番のもの先年一寸位之七寸位ニて因縁ばちばちし仕掛候ものハ大船に
有之ていしたる船何艘も唐人まで積り凡三百人も乗居候由異国之産
帆のかたちなとし大筒ニ并碑石中ニ人数多く来り囲むよし候様の
はせ張の人とも大合戦之由申候ものあやまりし其外ニハ下の岸の方より浦山ニ出張いたし候処
右女人数の内ニよき候ゆへ大合戦ニ而候由ニ而三人即死仕候由
唐人ニも三四人即死ニ而候由何れも死骸かつぎ船ニ引取候よし下の岸の

唐人ゟ石火矢鉄砲を放ちかけ火を出し前田とられ候の村茶屋と百姓家二軒焼
失り申候右様の場所ニ而誅ニ怖々ながら唐人余り怖々取りしや
様なるも仕舞ハ逃出申ニ付唐人も跡ゟまゐる大刀一振又砂利玉を落
出るも御座候右御用ニ付寄手ハ綿緒の様ニ存申候よし中々数多のものハ此上
無御座候と申やう也考申候はやく上を思ひ袖をさし取り何れとも不思議に生け捕り候
の者共とかく知らぬ也寄手も御上ニハ気をつけ上一向ニと素より将手ニ先を取候事無
御座候事御存の隠居をいたし候ても交代にて候得ば此度御国の隠居又ハ此度
廻り候の国人何も罪なき女の隠居とも存じ仰付ハ当所篤と相改申中ニ少々姓名
も廻りとしまして様の御侍衆ニ而御座候得ば此方ハ当所二十四五人にて相手に致しまゐり候由
ハ御手当様も当分様も八百余一万次の方悪き女中にて次の二万ニハ当方の人々
一番ニハ恐れ誅しし候処存外も女中の無体を兼ねてハ故帳の勝く東側にも故ある

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　　ガラス使用

なく私無ハ了ふ友持を立て雨降ニハ夫ニハ傘をさへ付風呂を焚ハ中ニハ遣りハ
拭を寄り行水を遣ひ此ハ其ハ稀なる雜事なるハ其ハ為ると中ニハ涙ニて困入ハ下
の関ハ家和不殘山の中ニハ引込ハ中ニ実ハ日本一の湊にても丸て用ニ立ふり是ニ
ても女老人子供ハ立退一家ニ一事人ハ信ハ如郎そなかも殺りなく山の中
ニハ引籠居ハ中大家の所人の家ニを望て鉄砲手ち荒木手崩ハ中ニ尊紙ニ書し
兼ハ所書し一つとりとの我ニ意の所側ハ送金もまゝ所通しハ居ハ下の実所出
入所他ニハ余ハ所用ハ刻ハ如茶又ニ通家ニ立退ハ所ハ夜何ハ付大国りとりし
ハ所入ハ多く十方ニくれハ所ハ何ハ一のごとりと

流書

長府ニ八日ニし唐船のみの路キハ居ハ所場刻ハ高張の所ハ上へ下へ
と殺しハ御表ハ異ともハ居ハ異ふ殺外ハ所預ケ相成ハ所付ニ御体も大落

六月十日

きハ居ハ十一日ニも イキリス大船余りハ右六ツ半時ハ茶の為とて沿ニハ帯留ハ殺ニ
ハ近て居家測量のみハ出帆刻ハ中應接ニ出ハ所ハ亀ニ立ひ殺も居ハ
何ハ又ニ余りハ中と居られ亀ニと心痛労苦何の為ハ分りふりハ唯ニひやしと
のみ刻居ハ所ハ中も當表の様子ニ居ハ何もしと元ハ御本家様のくるふ
友ハ了ハ所ハ中ニハ右ハ毛利左京亮様のる奥方様ハ土浦侯ハ嫁ハ事ニ土浦ハ奥ハ老女より
右ハ毛利左京亮様の奥方様ハ土浦侯ハ嫁ハ事ニ土浦ハ奥ハ老女より
の文通の写なりとて雲葉翁の見せらるゝを昌平橋南の寓舎ニ筆とり
てよりをらはせ

松平大膳大夫差出の書付二

豊前守

昨朔日午刻長門國豊浦郡赤間關へ吳國軍艦壹艘上陸ゟ家入口所繫有之ト大膳大夫警衛人數并末家毛利左京亮警衛人數ハ臺場軍艦ゟ一同烈發致打放ハ兼吳國船豊前地之方ハ無家寄又ハ無物上陸ゟ逃去申ハ候同兼出張之家來ハ遂行追ハ付不取敢其所ハ留申ニ付松大膳大夫ハ了付哉ハ付申ニ付以上

六月廿八日

松平大膳大夫田
小幡 [illegible] 七

當月五日朝佛蘭西國蒸気軍艦弐艘長門國豊浦郡赤間關ハ襲來因兼前因ハ了知之有之ハ臺場ハ大炮烈發打拭ハ付大膳大夫ハ指出ニ兼ハ警衛人數打合無間賊兵上陸せしめ小銃を以及對争ハ折柄程近之民家其外燒失之

及ニ右臺場ニ路程隔居後應接の場柄ニ而警衛ニ者頻ニ及苦戦賊兵數
人切倒ノ事ニ厭ニ為カ負味方ニも鋭丸ニ中リ遂ニ斗死ニ者ニ人ノ事負サニ者ニ而ハ夕七ツ
時ニ及退帆ニ而ハ出張ニ家来ニ遂ニ進ニ此ニ不再敢ニ而申上ニ候ニ
晴太夫ニ付戦ニ付申上ニ以上

六月廿八日

松平大膳大夫内
小幡[illegible]

○加賀中納言家来差出ニ書付

豊前守

去ル七日傳 奏坊城大納言様ニ家来ニ者ニ呼ニ立ニ紙ニ通ニ而ニ書付御渡ニ成ニ不容易
御願ニ之ニも而ニ書付写ニ之ニ相添此ニ申上ニ以上

六月
[illegible]

加賀中納言内
加藤屋十左衛門

別紙

外夷拒絶朝限ニ事先達ニ天下ニ布告相成ニ上ニ於列藩夷船攘作ニ心得勿論ニ
處傍觀ニ寸過ニ藩者ニ而ハ深ニ悩 宸襟ニ既ニ於長州兵端相発ニ就ニ
皇國ニ恥辱ニ不相成様関藩一致ニ設ニ為ニ

敵愾冒徹致ニ候 [illegible]

○松平遠江守家来差出ニ書付

豊前守

去ル十日傳 奏聞ニ在宰相中将ニ家来ニ者ニ人差出ニ候町奉行渋川橋ニ寸ニ候ニ達
ニ付差出ニ処ニ書付ニ以ニ作詳ニ付右ニ傳ニ義如何相心得ニ不然ニ

之旨大坂御城代松平伊豆守殿ニ御伺候先御奥仕ニ相成候ニ依之事畏候候
請仕候ニ付候御座ニ候ニ遠江守ニ付報ニ以上
六月廿九日
松平遠江守家来
宮木彦右衛門

別紙

攘夷御很之義先達ニ布告ニ相成長州ニ御ゐて道奉　叡慮斷然及掃攘之旨此度
分決議来ニ付二念ニ御拂下ニ至ニ諸藩互ニ相援兵力防禦之義ニ候ニ候出ニ可
別紙

長向御座ニ付通京都ニ候ニ候議ニ候ニ候ニ候　公辺ニ候ニ候議ニ候ニ候
公辺ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候
諸事ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候
○松平紀伊守差出書付
豊前守

去十四日野宮宰相殿ニ家来之者ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候
内仕ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候
末弓冥吳人数来懇及戦争之遂達　慶雲謝之義ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候
攘夷教授之後ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候
都尊足仕候此段御座仕候以上
六月廿九日
六月廿九日出
○六月廿九日松平讃岐守家来伺書同廿九日
雲原紀伊守
居明
覺
書面之義ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候
以ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候ニ候
○松平讃岐守家来内意

去ル七月於京都坊城大納言様ヶ家来之者ニ付出ニ而以外之迫ニ付達ニ而当同伝語家来共ヶ
申来処南部侍従ヶ後様ヶ濱川迄ヶ堪構境川辺迄ヶ郡来ニ付付人数出発中付ニ
来ニ而右ヶ達面ニ随ひ外夷通船又ニ砲沼ニ付ニ節近辺ニ郡来場所ニ而万一開兵端ニ
其儀ニ付ニ終来於場所ニ兼様ヶ段然ニ処南四月 中大国 付中様ヶ家来ヶ迄ニ来
迫激ニ而業ニ付ニ迄ニ付ニ中ニ而今以ヶ続列中ニ付候ニ付ニ兼様ニ付候ニ付
其心得ニ而ヶ遠境隔居ニ而一意ヶ様ニ付ニ而ヶ為ニ遠意便ニ此ニ在処儀ニ付ニ戦
様ヶ所ヶ郡来場所ニ詰家来共ニ中ニ而ヶ今ニ付候ニ付ニ此ニ而ヶ為ニ而ヶ
六月
松平儀ニ付内 北原老人
別紙
外夷拒絶難限ニ事先達而天下ニ布告ニ而ヶ上ニ於別度夷船様ニ付ニ以
勿論ニ其処侍観ニ而過ニ蒲ニ之疑深ニ悩 震襟ニ長州ヶ兵場ニ罷ニ
而ニ 皇国一体ニ候ニ而ニ互ニ兼様掃様ニ而ニ 皇国之恥辱ニ而ニ
闔度一段安義尽力 敵寇貫徹ニ付ニ拾 ヶ所詰ニ而ニ
六月廿五日出 同日持出
○閑叟様ハ強ク 禁帝ニ様夷之儀ニ付ニ定ニ 仰上第一ニ此上京都冥東ニ而ニ有ニ
冥東ニ味方ニ仕ニ仰上ニ里京都ニ出ニ而ニ節ニ而ニ冥れニ其徳川ニ松平宋叟
ニ而ニ里ニ何ニ而ニ勇ニ而ニ無ニ謀ニ付ニ人ニ而ニ
○小倉侯申上ニ至 附 長州ヶ老 返翰
先朝日申上置ニ松平大膳大夫様ヶ家来斉夏文三郎ヶ為人領内田ノ浦ニ罷越
同浦止宿ニ而ニ募人数相増都合拾三人押ニ止宿ニ付役々之者同所ニ相詰稀々及談
判ニ得共不致承引空変ニ返ニ此内先月廿四日朝右人数ニ内七人下之関ニ渡海ニ至時ニ

凡七八十人程罷越大炮壱小筒五十挺運越同浦江上陸追々三百人程も罷越候
之由旅宿之儀掛念仕候付口番相断候処同浦人家江乱入致候ニ付無拠旅宿
為致候右様不法之振舞ニ及候得共此方ニ而ハ穏便ニ仕候処先達而申
候通領内備向之儀ハ一円無場所江大炮備付異船江挟撃以テ致方異船渡
来之節ハ兼々申合置候万一之節ハ猶又人数差出上陸
之節ハ手強可致旨申付置候処此度之異船江一切通路不
為致候得共若此上及乱妨候ハヽ打払可申旨申付置候
候ニ付挟撃之儀者兼而申含置候得共当時之処是迄之振合を以取計
罷在候
之旅宿并荷物等移シ方之儀ハ御差図次第仕度且又此度大膳大夫様御
渡中江之御返答之儀ハ則写差上申候此段御届申上候
以上

七月四日

[illegible]

二木栄庵

此札御披見之上大膳大夫様益御機嫌能被為遊御座候由珍重之御儀と奉存候然ハ異
国之一件ニ付而ハ御手当等之儀ニ付於当地御家老江も相達候処
異国船之儀者御国内江渡来之節ハ打払之儀ニ付[illegible]
御手当之儀被仰付候旨奉承知候
御当地之儀ハ[illegible]
会所江罷出候[illegible]
叡慮之御趣意奉恐察候[illegible]
叡感被為遊候御旨ニ付[illegible]
朝廷江忠節之加之[illegible]
将[illegible]

なお忍乃文字を用ゐる後々別紙写を通ず後
日の参考に供せんため、茲に附記論ずるまでもなく右の書は
万葉仮字考
七月廿日
小宮山昌秀（かりそめのこと）
小宮山楓軒
小宮山楓軒
浦 靭負（ゆきえ）
福原越後
宍戸備前
事 この条の末
さて右の書付を以て、皇国の古代を証する
を引き合せ後々事機に係ることあるの日の参考に
供する為めなり
○
非常の節京地守護職ならびに九州肥後守の
ごとき都ゐ肥後守得ざる国相勤め候大坂の城代並びに
四国ノ近国諸大名且伏見奈良奉行ならびに
右ゝ通稲葉長門守へ相達ず問一のごとく
○七月七日封書ゐる和泉ゐ定ゝ家来呼出相渡ず
通
九州大膳大夫家来小倉領内ゐ立入不法之所業有之
間名代ゐ別紙ゐ通小笠原大膳大夫へ相達ず間此上二家ゐ
隣国ゐ交ゐ諸事ゐ小笠原家ゐ合應接一の致ゐ
ゐまゝ申合一のゐ為ゐ
肥後守
九州大膳大夫家来小倉領内ゐ立入不法之所業有之
間名代ゐ別紙ゐ通小笠原大膳大夫へ相達ず間此上二家ゐ
隣国ゐ交ゐ諸事ゐ小笠原家ゐ合應接一の致ゐ
ゐまゝ申合一のゐ為ゐ
美濃守

小笠原大膳大夫

松平大膳大夫家来共ニ而領内ニ立入不法之所業ニ及ひ候由以之外之事ニ候
畢竟ハ依之右家来共及引揚候様松平大膳大夫ゟ相達候間其段承知可有之候自
然於不引揚ハ時宜ニ寄取計可有之候尤松平美濃守黒平大膳大夫ニも
様子承り達候間諸事可談合候一同ニ可致候也

[illegible]平大膳大夫

同文言 小笠原大膳大夫領内 松平美濃守へ可令 有之

某氏手東 二ノ廻

長州ニ而夷人夜合大敗北並砲台打崩し上陸いたし已ニ萩の城を只一まみにいたし候由ニ
攻寄り候戦持ニ而ハ不叶ニ付和議ニ而夷人を止め敵夷と日夷萩の城を手渡しいたし関東へ対し
和親を結び候事ニ付夷人ハ船ニ引退船を旨上陸ニ上る御人数具足着候
横浜ニ持参いたし候由長州侯ニ而石州津和野城ハ亀井殿引退ニ相成候由ニ候
ニ絶ト長州侯も今は兼而之所置と存候以後之御存ニ思召之事ニ御座候
州とも此度ハ已交易拒絶ハ難出来ニ付とて事ニ而御座候誠ニ残念ニ存候合国一体
なりとて 神国ハかやうにしも交易ハ夷人を嫌ひ候ことハ是迄ニ存
其為戦争ハ義理ニ立向ひ誠実ニ礼を尽し候致候事ニ御座候
由且交易之品ハ不足ニ而年年不足の故ハ更ニ無之却而 皇国ニ金のふえ候事と相成
以是迄ニ有之候武家ハ難渋ニ相成り候へ共長州ニ而ハ三百石

打得る事皆打破り不申候戦将帆先ニ出居候由ニて一番打ニ玉ニ当り即死之由
之由数年来海軍ニ心を尽し候ハゞ申候揮孫之助行届船の進退迅速之企なし候ハ此節
一旦長州ハ是迄之建白杯も皆上ハ心計之内心ハ只兎ニ角ニ公儀を押倒シ候
了との存意の由ニ候へハ多分ハ得其意ニハ無之候へ共右様之事有之由ニ候へハ是
存候へハ此度の振舞旦是迄之本意ちと怪敷事也やへ天下の心ヤ左も有之ト
ヘ之候ヘ全　東照宮之神罰ニ可有之ト薩州ニても何れも手傑之事之由ニ候由尚又薩
兵船之内使番　牧野左近（千五百石）　村上求馬（五百石）　中根市之丞（六千石）ニ仁の出向ニト
板倉様ハ存分之御評判宜敷由有之ハ[illegible]之由ニ[illegible]
御行ト
酒井様ハ老中職様御船ニ[illegible]
落合も何れ女子[illegible]三方急ニ出張之由ニて[illegible]文

易之由ニ朝廷有之候処被何とも其儀　攘夷之事有之処人仲間ニ[illegible]更ニ夜
ニ不足ヤト　勅諚之儀如何ニも得其　天子ハ何とも不被為有之御長
州の手傑ニ付是ハ如何ニも実地を以存候と更ニ攘夷拒絶之事
ニ付　切歯扼腕ニ不堪　御国体を御成行ニ付一ト十之皆従来之謀計
落入候[illegible]之事を決て此之出来候[illegible]手ロ候ヘハ

○一　別紙
長州表之儀先達而中小戦争後敗後ハ小倉候様兵ハ[illegible]を憤り
右之節ハ長州表之十乱入甚[illegible]文ハ咽喉之地を自侭ニ夜[illegible]
様之不法之所行之[illegible]小倉候之談判[illegible]一向[illegible]其[illegible]
相成[illegible]長州[illegible]乱[illegible]
[illegible]唯今之姿[illegible]東北[illegible]
[illegible]兵[illegible]不[illegible]

趣ニ候得ハ宜敷可取計旨被仰渡

小笠原大膳大夫

七月十九日　三家ゟ達己録

○風聞

小倉領海岸へ長州家来三百人程参り茶屋有之所へ押入造作を毀
破却致シ陣屋と致シ且其近辺之百姓を悉追出シ二千五百人と相成事を見て右
様之砲ハ何之役ニたゝぬとてカナツチを打砕候ニ付扉下へ陣屋杯設候ても乱妨いたし候
かつ右様之所ニ依る小倉家来大ニ立腹何とも戦争之用意いたし已ニ押出シ候ニ付家老
中備ニも打出候ニ付重関東へ早打を以テ手伺候処右様之儀ハ兎角是非三家へ之命
小倉領之有之ゟ長州人数を引取候様申遣候得共速ニ打返可申事故穏便之取計方
引とり候様取計可申候　何分ニ付右之訳ゟ長州へ及掛合候得共如何思召哉右穏ニ
引取申間敷無之候乱妨之事共尤候得共一事を以候事之由

○長州より之

以来小倉之屋敷を築出候長州合格別之趣ニ付既ニ長州領之内土なとも運ひ在
之候所色々深切之世話いたし候得とも有之且隣国之好之仮令関東ニ入候筈之所へ共
厳慮之旨も有之殊ニ異国を攘夷打払之上を寛子候様致候由
思召候所様ニ御座候由にて候之処何も武士道を不存仕方有之哉と存候由

○亥八月九日御用番板倉周防守殿へ差出之

今般大膳大夫国元へ監察使正親町少将度々差下大膳大夫父子へ別紙写之通御手書
を以
勅宣之旨を　仰渡難有奉存候右ニ付父子之内上京可仕旨家格之先例も有之候
心得其節昨年十月大膳大夫参府　内従ニ付為御礼使者を以上京老中様へ書札差出
申候右之段先以御伺可申上候以上

八月九日

松平大膳大夫内
小幡彦七

別紙

攘夷之義布告之処於長門宰相父子志不誤期限膺懲之
叡慮不斜以依之為之慰撫軍勞　勅使之先下且隣藩へも應援之義
命以乃早速　奏成功掃洗國辱　事安
震襟事

○長崎奉行支配向豊家小倉地ニ為取締出張中之次第書状寫

私儀小倉地ニ到着之先日通行之様子彫り以如田ノ浦ニ罷越居ト長州人数乱妨追之
増長致し其節之近邊山村ニ行事を不法ニ伐有ト故百姓ニ一同立腹致し様之狼
藉者を其儀先事ト後何を残念之事且大金ニ相成ト諸之の持山を不法ニ荒され各
産業を失ひ追ニ飢渇ニ迫り以至此上を長州ニ備へ打越り打死せん杯といひしめるに付
小倉家ハ右之諭方等ニ到り其心配彼是奔走以致し且長州ハ其田之浦其儀地是非其
表之借用之義致承知ト様強迷毎ニ為之ニ中色ニ越合詞之内ニ將軍家ニ
禁裏ニ對し忠義之者与存ニ或与長州家来ニ付め何ニも忠義存ゆる小倉家
来答ハ得ニ長州家来支ニ心得違之將軍ニ極ニ不忠者杯とし悪口同様之
挨拶ニ右問答之次第ニ何事ニ月後ニ相侵メ其上ニ於ケル
其後も小倉ニも正路ニ関東ニ下知を相守ニ内ニ長州ニ何様伏判いたしたるも

加勢之事一向取敢ふ事且　御内勅も二度迄者ニ付候迄上ニ種々強
様子ニ而度々如七月十四日今度長州軍見舞として京都正親町少将諸家ニ
親兵四五六人を引連周防の山口迄下向之家此頃中俄ニ西國筋肥筑南國
海岸巡覧ニ申解し九州地ニ渡海之趣相聞ハ右使者之由ニ付ハ伊藤樹本忠
夫肥後藩川上ハ其斎姫路藩萩原席ハ三人之者小倉ニ渡海同家家老ハ
ニ西舎是薩国ニ有なぐら長州家ハ加勢ホ無之ニ而如何哉次第此上正親町度々
勅諚之趣を以念加勢之事ニ　仰候右ニ而も事ニ不敢ニ而正親町度ニ仰家哉
者之由否哉返答速ニ承り再伺ニ而ニ仰付ニ而ハ性者ハ条りニ而とて強談ニ小倉
之家老ハ申ニ誥ニ申し詞を返し彼是論しハ得ハ性者ハ議論ニ而ニ不正
親町度之仰を受有無之返答迄之ニ而一向取敢ふ事ハ右ニ而小倉家老ハ
當惑心ニ至極私旅宿へも無何欲思ニ而ハ無之哉ニ而ハ心付度一二事

ア中當座之取計ニ而ハ誠ニ無弱小気之事風和ハ家
存ハ聊ニ不取用ニ終ニ正親町度之教命之但セ已後長州ニ同意事賊并掃
方一の段由相答ニ由家老小笠原内匠ニ者無之誠ニ面目次第ニ無之ニ謝ニ是迄
公邊之所下知を未待ニ而ニ張ニ不存ニ而ニ而ニ誠ニ以殘念ニ至極ニ而アヤマト
不是ニ其所ニ子細ニ有しハ不得ニ長文ニ而ハ後便追ニ而ニ其一の仕ニ物
右様ニ而ハ上ニ性者ハ是ニ有ニ何之詮ニ無之且長州同意ニ得ニ同家
ニ争之事ニ有ニ而ハ長藩奉行ニ於ニ拭念之事ニ無之ニ而ハ速ニ御峠ニ而ト
方一の恐ニ存之合ニ同日付方ハ談判ニ而ハ同所ニ同所引掃ニ次第ニ是
ト同用ニ存ニ速ニ御所ニ相宜哉ニ得ニ掃ニ張ニ今ニ無ニ事柄ニ念ニ
無弱詰ニ是非ニ候ニ何ニ

夫八月

一 三橋嘉兵衛ハ今朝參リ所 公方様當月三日ハ暇之 ハ參内有之輙ニ仰出者之
彰リ且近ニ 還御ニ相成ハ 御本丸之ハ普請 去ル二日火火上ニ移ス 大急ニ有之ト事左
ハ一ツ右ニ未タ 仰出も無之ハ取用ニ相成不ルヲ 百七州ニ戦争ニ長物ニ軍艦
三艘共ニ砕き実ニ敗戦ナル事肥前老侯此節ハ上京ナル説有之ハ乱如何ハ
座ハ武橋本殿関東ハ下向之ニ至ニ姉小路殿一條ニ付ル ハ見合ニ相成ルハ此間
中ハ國司方京都ニハ呼寄ニ相成ナル事彰リ所加賀侯仙臺侯も京
都ハ守衛ハ断ニ成ルナル事右都下之風説荒増申上ハ実否ニハ睿知ニハ
斟酌願上ト 六月九日 茅弥

家里新太郎

此者元来姦佞之性質を以儒者ニ種々上木を少判ナシテ書畫ヲ賣買シ
ハ多ク猾小罪ニハ幕府之吏人ニ内通シ名教ヲ乱リ多ク正議を欺き 公武離間

之謀計を廻らしに段不届に先達て逃走之事亦ニ立皈に付自ら大罪を招く
者也依る斬戮を遂其余之迷惑之巨魁をさらせものや

亥 五月廿日

右三條河原ニ切首さらし右之通文面板ニ認メ有之右人物三十四五戈之
此家ニ芳野ヘ出に所京師与力より送りに書状之内ニ有之家取ハし右新太郎
ハ当春ハ江府ヘ参鷲津杯能存居中に元来藤森之弟子ニて囲碁杯ハ
余程出来にあるしてあ春秋月右京亮様に上京之節に供致迄のあるゆ事

○一 已下矛弥六月十日手帖ニ添置在京ニ川氏所君連知書出ありしかるや
五月廿日夜子之刻頃姉小路様 御所ハ退散に途中ハ狼藉者四五人切ヲ以太
刀持に当持逃去に小性ハ人大傷ニ狼藉者刀ハ本搭置逃去姉小路様ニハ
屋敷ニ御帰り一言仰述ニ事羽三朝に落命に小性ハ元足切ニ至ハ内引續
三条様ハ退出有之三条様ハも切ヲ以ハ土州に家来に近習相勤居り故に

防戦に無難ニ御帰館相成ハより
堪所ハ公々に門南之通ニ複木ヲ不之より
右之事ヲ付ニ速諸家ニ御告被 仰付御所六門外三門ハ警衛人数ニ出る

○一 五月廿二日
昨夜四半時頃ハ今津様に家来六角近迄見廻り有之暁七時頃人あり多く
東洞院通ニ右に家来多人数詰居明六半頃薩州に家来三人并若堂ハ人
都合四人同道致し引取ニ相成ハ付進ニ承りに知東洞院通薩州屋敷前宗
某と申醫師地面ニ旅宿居ニ暮も張置相應ニ御家来之由也
右四人ニ去ル六日夜姉小路様ニ及乱妨に者ニ御所ニ相成ニ見ル故
今津様ハ被 仰付召捕と申ニ無之御国召とかゝ名目ニ同道致し三条様ニ
指出直ニ西町に生行ニ引渡ニ相成ハ知ハ人所ニ行ニ有之自殺致しハ若堂
ハ入牢或人ハ藝州様上杉様ニ御預ら 仰付申名家来ニ不忍白殺人ハ

田中新蔵とか申数ニ而居て

○口状覚（出火之節之事）

今度　禁裏　御所火之元（元見）ニ後牧野備前守殿ニ　仰付ニ而為目下左ニ而ニ　同所相成ト

陣笠五枚　表金タヽキ裏無金　腰元挑灯五　紅地白水玉　秋霞五　紅地白水玉

右之通同殿ニ相成ニ上ニ遠近ニ不寄三番追詰追大火之節猶追ニ詰追ニ後ニ

仰付ニ而以来九門内ニも同内玄関ニ下ニ而ニ若途中詰追ニ　御指南方　治堂

上方ニ行逆ニ下ニ下馬不仕ニ引返之節ニ九門下馬馬為牽ニ若同門ニ右之

男ニ様ニ行逆ニ節ハ下馬仕ニ而事

一　出火之節人数先出ニ而　東加茂川　西堀川　南二条　北鞍馬口

九門外敬云固人数分配

清和院　土州　寺町　門外混雑ニ而ハ門内清院ニ而築地際　肥後　堺町　長州

下立賣　仙香　蛤門　水戸　今出川　日新　備前

乾　薩州　中立賣　日新　因州　石薬師　阿州

禁裡

南門　當平家番　藝州　東門　日　上杉　日　北門　日　奥平　西門　會津　所司代

糸集之節九門内糸馬ニ苦ニ而

右之通諸侯ニ被　仰渡ニ而

○一　出火之節同殿之通此度九口同門同殿之而

但水戸ノ横　御免命津横ニ　仰出ニ而

上杉横　藝州横　吉川監物様

右同三人ニ二十日夜婦小路横刃傷之事ニ容易ニ而探索之事ニ仰出ニ而

口状覚

五月廿三日

婦小路殿切害　薩州　仁礼源吉郎　田中雙平　同人　本来之人

一 九口御門御番ゟ 仰付日見張之者下座之事
当之通 関白様ゟ初宮方門跡方堂上方非蔵人下座礼節ニ不及致候事
一 御門出入之儀 是迄ハ名家ニ相限日暮ゟ四ツ時迄滞り無之候事
御所御用 諸家方宮方堂上方御家来ニ候共名家行先其等承届ケ四ツ時ゟ
翌朝ニ至り前後之通名家来札ニ而差通候事
一 御築地外之 諸家方堂上方非蔵人見廻り之事 役付一同之事
右之通御番之諸家ハ可遂其沙汰 家来共近在之役所ゟ仰渡候
猶又無相違様御門出入之儀一同之跡之事 六月十三日
右之佐倉様衆ニ借写ス 尚其上之内ニも御明日出ものニ有之候 何事も向ん筈之相
違等不相見候 御所之様子ニ而名ニ借写スル 右様無相違之事
○別条写不之出様読無相違之間尚事之趣意

在京玉川氏所贈 子津田氏

償金之事
去ル九日於横濱英小笠原図書頭殿償金差出候付
昨廿日 松平肥後守水野和泉守板倉周防守参内被仰渡候
天朝申訳無之何共恐入候 此上ハ老中始府庫撲殺候も迚も難及力
大樹自身小田原駅迄罷越候而 一橋水戸ホ呼寄関東之情実
得と申付候上急速攘夷成功可有之旨上何分無之 大樹自身参内相願候事
是迄会津侯始御家 御固場所其外御役付者共仰上候上ニ而追々仰述
此御口上之御趣意相違無之旨申聞候事

○一 橋殿関白殿ゟ先達而御状之写之由ニ而御内々荒尾殿ゟ入御覧
相伺候処去ル廿一日中宮様御参内之節傳奏衆ゟ御渡相成候写之由ニ而相
見へ候由 右之趣先達而御教諭ゟ在京之内之事内々御写有
之候由 右等之趣先々之事ニ而御覧入候

此度攘夷之　聖旨ヲ奉シ東陽仕ハ全勝算ヲ設ニ至ル年以上
綸言如汗幕意亦不可有故ニ當今關東有志ヲ同死仕ト心底ニ以上
処閣老并大小之有司同志仕者ニ人も無ク倍ニ胸中禍心ヲ包藏
仕ル事横議生し窮心不服ニ嫌疑ニ相報シ　勅旨貫徹仕ル事
中ニ以不相成抑関東ヲ有ニ情実ニ并宇内形容ヲ不相察頻ニ年智之身
ヲ以主夫ニ攘夷奉命仕ル能不堪恐懼奉對　天朝誅以事恐
乃ト且幕意ニも無ニ之事ニ重ニ不相濟ニ至ニ以上ニ依ル之詳ニ罪ヲ閣下
ニ本侍ト出格ニ御憐愍を以當職　御免相事ト様　天朝以内奏
伏ニ本願ト誠白頓首
五月十四日
慶嘉
殿下

一　五月六日夜傳奏方ヘ明六一日四ツ時御条内ニ本様ニ　仰出ニ相立ニ十一日以条内ニ本ニ以方ニ様
中津様　上杉様　岡山様　藤ニ加様　土ニ加右代　山内仙ニ卿　吉川監物
右御条内傳奏議奏衆ニ以謁成ニ如一橋様ニ云ニ言上ニ又償金ニ之事ニ
嚴重法ニ以ニ有ニ之ニ如一應ニ同もなく云ニ行ハ其不敢合ニ弟且ハ此場ニ　大樹公
帰府ニ被ニ攘夷成功一の相事ニ成ニ帰府ニ被ニ為ニ詮ニ事ニ以成ニ迄
如何ニ之ニ尋ニ之ニ風雪仕ト

一　五月十八日夜新町夷川上ル町伊右ニ驚ニ以ニ如何ニ見ニ者方ニ天誅方押込
如ニ裏口ニ逃去一命を拾ひ御ニ親六才時ニ深ニ以ニ事ニ有ニ之ニ右ニ渡辺氏
旅宿ニ云ニ三軒程離ニ居ニ場ニ故御ニ親ニ通ニ之ニ一ツ之ニ庭口ニ入ニ之ニ
破ニ之ニ居ト此名ニ不ニ得ニ之ニ去ニ之ニ

一　同十九日夜儒者宗里真大郎ニ云ニ天誅ニ之ニ行ニ之ニ条ニ以ニ事ニ聽ニ之ニ此一

条ハ義明と大官の人偶出しよりも偶ありと同人の事ニ付ニ

一 同六日夜子ノ刻婦少路殿ニ追出スヲ治人体ニ云ヘ三人ニ付ヲ見ル胸板へ
ヲ見ル者ハ横腹ニ突ヲ見ル者ハ如ヲ見ル者ハ口論宅ヲ見ル者ハ

一 同六日右狼藉者三人并美堂ニ人今津橋の人数ニ見ル捕ニ相成ハ全ク落落ニ
ヲ殊ニ今程身柄ニ者ニ内蛸茶師ニ内ニ家ニ居ル者ニ捕ル所ニ引渡ニ成
ル如同所ニ於ケル何ノ手段ニ成ル者ハ自殺ハ致シ二人上ニ於ケル警州ニ於ケル頭ヲ成ト
出来ル者ハ入宰ニ由ニ此者今程ニ者ニ於ケル狗追ニ内ニ吹味ニ成ハ御上ニ方ニ此
引合ニ云ヘ者ニ一ツ事ニ詳判仕ト云容易ニ及ヒ存ト

一 小倉横田藤次ニ見ル船ニ於ケル同所ニ番船ニ於ケル者ハ軍艦ニ出ル士ニ於ケル
見ル船ニ於ケル二艘ニ於ケル逃ニ於ケル定ニ追ニ横濱ニ於ケル已ニ難ニ有ニ而ニ容易ニ及ヒ心配
仕ト云ヘ者ニ内ニ相手ニ為ニ罪ニ出ル者ニ

此迄玉川手留

五月六日

○在京留守玉川氏一学ニ為ニ出ル忠左衛門主編同役富岡茂ハ一所略
今朝三条大橋ニ於ケル町程川上河原ニ於ケル首者ニ殺ル所ニ於ケル其ニ於ケル多ク出
左ニ於ケル板札ニ徳建者ニ

建札文云左ニ通

家里真大郎

已前録故略

右ニ紀州ニ家来ニ一端逃去家来ニ国元ニ差出し代度家敗取行付として京地ニ立ル
り悪言ニ云ヘ者ニ昨日時乞ニ書ル今次日国元ニ出ル一可殺虚ハ夜四ツ事時ニ此
州ニ家来ニ中相名ニ尽ニ尽ニ云ヘ者ニ付ニ其ニ申ニ妻ニ母六十七位ニ内此者立出戸ニ

明ケ時ニ五人抜身ニ迄入ル人裏ニ方ニ逃出ル今際ニ井果ニ於ル五人ニ於テ
立ち上ニ於ケ右老母ニ於ケ之ニ入ルヲ見ルヲ見ルヲ見ルヲ見ルヲ見ル
ニ心ヲ得ル者ニ有ル事有ニ於テ右之文云認ニ至ルヲ以テ姉小路
通リニ住宅ニ於テ

一 五月廿日夜子刻云 前ニ録

○一 贈参議左近衛権中将 姉小路少将

為皇王忠誠苦心依 叡感不斜ニ無愛憐ニ贈賜

一 白銀五枚ニ下ヨシ 吉村右京

之人於路頭横殺之節抛身命長馬節之来神妙之至ニ有ル

即成之旨 賞白殿ニ令リ申ル

一 乾ケ門ニ関メ薩州ヲ即免雲州ニ作出事

○今度京都ニ於テ傳奏議奏其外國事ニ於テ名前

傳奏 坊城大納言 野宮宰相中将

議奏 廣幡大納言 飛鳥井中納言 徳大寺中納言

三條中納言 長谷三位

国事参政 橋本宰相中将 豊岡大蔵卿 東久世左少将

姉小路右少将

同御用掛リ 三條西中納言 庭田中納言 徳大寺中納言

六条宰相中将 柳原中納言 川鰭右少将

橋本左少将 萬里小路権右中弁 勘ケ由小路中務小輔

同寄人 正親町大納言 滋野井中将 東園中将

正親町少将 壬生修理大夫 中山侍従

四條侍從　錦小路右馬頭　澤主水正

鴨脚和泉　同　加賀　松尾但馬

松尾伯耆　中川對馬

同日聞之ヲ

非義人

京地之風説書

一六月朔日小笠原國事御掛　水野瀧雲様井上信州様同日付向山源太

夫様土屋兵部様同一同大坂表濱ニ遂ニ和ニ同ニ相事同二日珠

弘淀近ニ出ニ来ル如京ノ同ニ其間ニ相事ニ同ニ所ニ同ニ返ニ而ニ風説有之ト

六月六日認　茅弥

今度應接之人澤ニ勘ニ事ニ御ニ一人ニ無之ニ金子ニ三千　呼ニ

○中川宮建白

謹而申上候短才不任之尊融國事扶助且以俗之蒙命寸功ニ無之ニ恐懼之ニ

ニ比日之形勢攘夷之期限ニ過ニ得ニ拂攘之形ニ不見因循送

頃

日　敵慮ニ洞察苦心ニ依之不肖之身不顧恐ノ得ニ攘夷之先鋒

常　仰度懇願ニ付自然　勅許之上ハ普天下之有志ニ布告ニ助力致之

只ニ戦死ニ遂ニ恩恩ニ報ニ一端ニ付度　勅諭諱ニ侍ニ恐懼諱言

六月五日　尊融

議奏中

傳奏中

○内到来為同志ニ相抄

五月　三月四日　於京都對州長食糧并接兵之分ニ遣ニ付　兵二庫表同藩衛御免ニ　長州

石ハ防禦筋行届ニ様ニ致ニ候ニ

頼ニ依國許守制且朝鮮国為援助御策三万石ヲ年ニ上ニ下毎年

ニ来ニ下ニ同金壱万弐千両ニ成ニ候ニ於京都表ニ蒙　仰　對州

五月六九日

大坂表為同藩衛ニ兼ニ出ニ付　御免　岩州

六月
摂播近畿の国　御免
六月
御蘭西人宿寺の警衛　御免
五月晦日御京着　去る歳日　御条内　新顔の拝
其上　天盃頂戴
六月九日
日光の警衛相馬侯の代りと掌　仰
六月十三日
御府内　夜廻り大久保侯の代りと　仰付
来る十五日大坂表へ御發駕とあるの積之由
六月　伊勢野宮宰相様ゟ當十月ゟ十二月迄
京師　御警衛と掌　仰
六月十九日
堺表の警衛柳川侯の代りと掌　仰
六月十六日大坂表より当心の用　去る十二日御代出帆一昨十五日袖奈川
表　年常着日十七日出府と候ハ大名の事

差別
日
松浦肥州
秋元但州
戸澤上総介
阿部橋州
立花飛弾守
彦根
浅野伊州

大日付ニ
来子年京都の警衛上京と　仰付ニ而ニ第紙之通ニ於京都ニ　仰付ニ出候ニ而ニ　達
別紙
京都の警衛来子年
二月ゟ
三月迄
四月ゟ
六月迄
七月ゟ
九月ゟ

加州ハ今ニ至リ外の積之由

松平阿波守
佐竹右京大夫
伊達遠江守
加賀宰相
奥平出羽守
津軽越中守
藤堂大和守
大久保加賀守

十月ハ
十二月迄

○六月十一日

○一説井上信州称之内ニ而供内ヘ入ル府之由

大阪ニ在代ヘ
日頭

出奔

阿部主計守
松平美濃守
溝口主膳正
松平甲斐守

小笠原図書頭
井上信濃守
水野筑後守
長谷勇太郎
向山龍太郎
和泉川左衛門
海野信賀守

六月八日九日頃
関門
日新

○六月十五日

此度長州ニ在軍ニ指向ク本城ト人数左之通

正親町少将殿
本庄宮内ニ在ル
本庄出張ニ在ル
郡定ニ在ル
本庄所属之ニ在ル兵
関所 水戸 ちゆ 黒山
本町新ニ在ル十人ヲ
久留米 姫路
大阪ニ在ル五人ヲ
メ五十人

水府藩

四辻中納言
京都奉行
永井主水正

正親町少将殿
本庄忠太夫
代ニ藤大八郎
小田急 藤蔵
関本勇三郎
中村順之助

藝州小倉中津
龜井西恩田
右長州ニ援兵ニ
作事之
○六月廿藝州世子
奎平紀州横今朝
京地ヲ出立ヲ玉元ニ
○同日奎平大膳大夫様
右同行

同

ト十人

外ニ薩州土州姫路ホ夫ニ分ル五人ヲ以テ出張本文千六日夕刻ニ親町殿同道ニ出
立ニ候ト
長州其後爭戰ニ及ヒ不可
此分条少々ニ御事ニ出候ニ付ニ書ニ付ニ
○千代田稲荷ニ評判甚し

寄合組
江幡定彦
稲殿長藏
国見鈸次郎
小川留ニ助
山崎秋之先

○別條ニ聞書　在京玉川氏紀聞

京地ニ別條実事風説共ニ左ニ認候

一　六月朔日小笠原出雲殿横水野瀬雲様井上信弱ハ目付向山源吉殿ニ在土屋兵部殿　民武鑑
ハ一同大坂濱ニ蒸気船ニ而着相成り同二日城弱淀近ハ出ニ手ニ而京入ハ若留ニ
相成ハ出ニ而ハ逆留ニ風説有之ハ

一　同三日
公方様御条内御歸府ハ暇被為
天盃御頂戴有之

一　四日右為恐悦惣出仕有之

一　小笠原横外ハ後人方淀近ハ戦ニ而京入ハ第一条右ニ償金ニ至ニ付ニ兼ニ
被仰出ハ御越意ニ而座ハ屋一應ニ御伺ニ無之御一己ニ御取計全御

速　勅之後ニ付御罪科御取調中不計も上京として罷越されハ始末以之外ニ付
此上如何様ニ而御決ニ相成ハ哉との下説取々ニ而座ト狼ニ恐入ハ事とも而座ハ大意
説ニ至ハ其ニ小笠原様御京着之上外夷之情実云々切迫ニ相成ハ事兼ゐ之被
仰出御趣意之義ニ深厚心得取計ハ得とも　皇國之御為斯ク御取計被
成ハ旨ホ御奏聞ニ相成リ萬一十三郷方御閉口之場ニ相成ハ得ニ此以後関東ハ
御威光不相立ハ付御厳重之御沙汰ニも可相成抔不取留道路之説専ニ有之ハ
一同六日土用入御機嫌伺として板倉様ハ罷出之田一直方面会御機嫌ニ而ト
変差御壮健ニ成御公務ハ合之ヲ聞ト雑書中ニ説恐入ト得ニ此段ニ宜敷ニ
仰上可成下ト仰其節内ニ彰ハ得ニ図書様去月六日江戸御出帆同六日迄
横濱ニ御碇泊ニ六日同所御出帆當朔日御発坂同二日淀ハ御着相成周旋様
ニも今暁御案切ニ使地ハ為御用談ニ而為入ハ多分今暁ハ淀ニ御泊ニ可相

成ホ更先ニ　御発駕御様様も一向分ニ而何卒當月中ニ
御発駕ニ相成ト様仕度ホ内話ニ而ヲ寄ト此段ハ出舎宜敷ニ願ト
但六日朝ニ本文之通リ之処今九日
御発駕也詰向ニ混雑案内ト
一三日ニ稲葉様御案切ニ淀ハ為入ト
一四日ニ水野和泉様ニ為入明五日御帰り来ニ御登城尚尾弱様ハ為入當夏
御登城御座ト之ト四日淀ニ通雪ニ御用談ニ了ハ噂仕ハ
已上至一ノ号
六月九日
千代田稲荷之事
竹垣三右衛門ハ代皮不武州荏原郡上渋谷村
百姓七右衛門地面續
千代田稲荷社
右社之義ニ往古　西丸ハ構内ニ千代田村ニ了場所有之ニ同所ニ勸請

御座下（知）前集之儀承り引稲石高十八石太田道灌ゟ寄附之由ニ付共外御
如年爾相立右由緒を以御稲荷蔵間口三間程奥行十間餘之明地之安置い
たし三石之所ハ元禄二年九月吉日上渋谷村之刻有之候処年を経候て
所ニても由緒不存知居候ものも有之候処當四月中旬頃不計 御本丸大奥ゟ表
使小山女中御出ニ而尋有之如何之次第ニ候哉大破之社御修復
有之並枚丸太新規矢来囲有之候右之外新規之幟并杭入口之内
弐之人形長四間程之高石之外神楽殿太鼓之類
成 御上洛 還御之為 猶以格別之 御祈祷も御座候趣 右ハ 御本丸
大奥之此節中火ニ付ゟ節右稲荷之神霊相顕し御守護申上候由 大奥
女中衆等年々告けを受候る儀之由信仰之相成候由 又一説ニハ右稲荷の
之神体 御側を不相離 御上洛之御供仕候之 當月三日 西丸炎

上之候も前以 御夢中之御告ケ有申上候由 御先キ之ハ関東ゟ立戻り候趣申上候外
品々御奇瑞之有之 御威之類も有之 還御之節 遷座以之 御本印ゟ至
御林下之種々風聞仕追々御参詣およひ候由 御武運御長久難有事之趣申
御家中ハ諸家様方諸之御繁栄ハ申すも更ニ御座候由風聞仕候 亥六月

○
一 京都別条 将軍様来ル三日 御暇御参内ニ御出立事 六月朔日

一 六月七日江戸出火之次第兄御屋ゟ御殿旅宿ゟ出ル
六月三日巳刻西丸御台所辺ゟ出火折節南風烈敷御多門御続御座敷上同巳下刻
焼失候ニ付 此二日夜丑刻ゟ飯倉弐丁目ゟ出火強く南風烈敷焼候ゟ西久保辺
御続焼四ツ辻辺ゟ八幡前下谷町濱田様御屋敷御類焼夫ゟ赤坂之方ゟ焼出
焼失申候 御本丸ハ無別条御座候之
右之通江戸表ゟ申来候 六月七日

定宿行屋
和泉屋甚三郎

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3
ガラス使用

○大坂ニ為浪人ニ角力喧嘩ニ成リ

大坂北新地ニ為六月三日角力ニ浪人ニ喧嘩ニ成リ角力即死ニ成リ

即死

龍ケ濱

大疵一命ニ成リ

陸ニ成リ一ツ小田

和泉川

熊ケ谷

若熊

浪人ニ怪我無之内ニ西屋役角力ニ為趣意悪敷ニ成リ西屋ニ

○摂坂防禦信地 小田原流ヨリ借写

玉造ハ無地

江口

岩崎新田

長柄鑄舟場

備前嶋

建國寺

安治川橋

本津川口船手ハ番所

川口戎嶋ハ番所

松ケ白異

主月山周博守

酒井修理大夫

豚坂淡路守

桂村豫河守

本多肥後守

丹羽長門守

小笠原幸松丸

遠山美濃守

織田瓦前守

小出宗税

玉造口ヨリ鴈木坂
十三渉舟場
安治川口番ヨリ早ヨリ來
中津川中之洲
追ノ手先
難波口ヨリ北
難波橋
家隆堀辺
真田山

森 伊豆守
織田 摂津守
一柳 ち代守
建部内近 跡
阿部 摂廣守
杉木 近江守
永井 信濃守
高木 主水正
柳生 流出郎

外表ハ海道ニ渡来之事ハ日蓮衛之人数出張場所生ヲ西之通ニ心得一ツ歳ト在
場所ニ於テ之事ハ所奉行ニ一ツ之詰ト勿論玉造口ヨリ外鴈木坂ハ口定ヨリ上ニ

該玉造ニ難波口ヨリ北ハ西ヨリ東行ニ長柄渉舟場ヨリ田ヨリ厩ヨリ来ニ口舟ノ事
三ツ為ニ家ハ佐野兵衛ニ江口岩崎松ヶ鼻十三渉舟場中津川中之洲ハ口代
官建国寺ハ松平左膳ヨリ来ニ一ツ所ニ俗ト

大坂町奉行組与力
近海ヨリ
東
朝岡助之丞
兵部野七郎
二葉左之助
八田五郎
丹羽欣次郎
由比又太郎
西田千之丞

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

寺西歳四郎
黒崎[illegible]
西 内山彦次郎
勝部与一郎
大森隼太
小川鹿之丞
大須賀[illegible]
田坂吉次郎

自閣老大坂口体代之日用状

此書面之御紙代横ニ用人ハ口頭之向ニ用ル[illegible]大[illegible]

[illegible]由

[illegible]地海岸相手相模ニ於持備外国船ニ及発砲ニ就一体外夷拒絶之儀ニ
横濱表之[illegible]来タ談判中之[illegible]猥発砲[illegible]兵端を開ル
[illegible]
御国[illegible]を引[illegible]相[illegible]
一[illegible]追[illegible]
来[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
六月[illegible]

井上河内[illegible]
水野和泉[illegible]

松平伊豆守殿

右之六月十四日国家横田国鳴家ニ至ル[illegible]

○六月十五日松平伊豆守殿ハ御達ニ而来ル

攘夷之儀来タ於横濱談判中ニ付ニ而伏ニ有無之次ニ難ク此方ハ手合ト
儀ニ見合ハ様弥以テ切ニ相成ハ苦ニ其ニ御達ニ而ハ一の者ニ而ハ彼ハ就
来ル内ニ無忽ニ家ニ而ニ而ハ様ニ而ハ一の儀ハ尤攘夷之儀ニ
仰出ニ付ニ付ニ而ハ無之清ニ而油断ニ就ニ而成ハ保通航之事ニ而無之
謂手掛ニ儀ニ付ニ而ハ各ニ而ハ成ハ已
右之儀ニ而達ニ而ハ下ニ而ハ

松平豊前守

○六月八日夕　御所ニ夜　仰出ニ寫

小笠原図書頭以下上京之子細不容易情態相聞ニ付過日以来詰問一の者ニ
老中ニ　仰付ニ得ニ最早ニ及ニ其儀次第ニ而ハ図書頭以下当ニ速一の及厳科
御沙汰ニ而ハ一両日中必其處置一の者ニ而事

大樹東下ニ必一の者ニ而ハ至ニ而ハ

尾州老侯ニも同様ニ而事ニ付候ニ而

○一　公方様亥六月九日京都御発駕大坂ニ而ハ立寄東海道ニ而ハ御着ニ而ハ
八つ時ニ大坂ニ　御着

一　同十一日御船ニ而天保山ニ　御成ニ而直様ニ軍艦ニ而ハ御着十二日ニ而ハ御城ニ移ル

○一　六月十三日天保山ニ見船一艘後来十人程ニ小船ニ上陸之中直様元船ニ
帰ル退帆図ニ而ハ固ニ大砲サニ打ル得ニ退帆ニ至ニ而ハ而ハ

大坂の城代
公儀ゟ御達書

其地海岸松平相模守於其備ゟ同船及発砲ト雖一躰外来拒絶之儀ハ於横濱
表未談判中之所ゟ即ニ不相成ハ如猥ニ蒸炮ニ渡し兵端を開ハ為ニ告国辱を
引起ト云事ゟ以之ゟ御之事ト弥ハ御ゟ相成ハ節ハ早速一の被仰下ハ事更近
ハいつ迄も是近之通平穏ニ取扱ハ彼方ゟ新来ハ節ハ其横ニ其ハ得ハ
自然動揺紛乱致ハ為ニ如合ニ付新来ト様ニ自ら考究ハ
弥新来ニ相違無之ニ得ハ前文之通其横ニ而渡し新来不了内粗忽
之事ハ無之様可取達ニ者也ト了来ハ此所ハ其達了候

六月十六日松平豊前守様ハ大人ハ呼出ハ特ニ出ニ来ル候
○文久三亥年六月廿日御用当ハ下ケ御奉書写
一筆令啓達ハ其方儀参府時節ニ無之ニ故ニ思召ハ得ハ無程御陽府之儀
付ハ御相談之儀も有之ハ当ニ江戸表ニ呼出ニ候ニ伝出ハ条ニ存ニ候ハ詳言

六月十六日

井上河内守
正義
松平豊前守
信義

上打掛

吉田信濃守殿

吉田信濃守殿
松平豊前守
井上河内守

一 同様ニ被召候十三侯

加賀中納言
南部美濃守
丹波左京大夫
南部遠江守
溝口主膳正
土井能登守
南部美作守

鈴木宗榮ニ而

上杉弾正大弼
佐竹右京大夫
津軽越中守
松平飛騨守
御名
堀右京亮

一 閣老小笠原侯 図書頭 於京都退職之俸一万俵被召上 或云官位ヲ奪ハレし

諸司代一 被召預云

一 昨日 公方様御払ニ 還御ニ相成 実ニ驚愕仕候 小笠原図書頭様之債金之御討て

御役 免且大坂御城代ニ御預ニ相成候事ニ御座候 京師之様子更ニ相分不申何之事ニ候哉 六月十七日 宗孫兵衛

一 去ル十三日大坂表 御出立 御船ニ而品川海ニ 御着 一通

浜御庭ニ而 入来 還御ニ相成 之御着ニ付

右之通 公義ニ 御出立 御目ニ夕八ツ時 還御 相成

一 公方様去ル三日御発駕 御参 内 同九日二条

十二日御ニ而軍艦 ニ而御出帆 十三日御出帆 四日夜 日御城

御本陣大坂表ニ 御着ニ而東海道御 還御一通り

御越 御出立 大坂表 御本陣日記ニ御座候

申上候一通り達候 六月十四日

右之通 右候ニ 御出帆候ニ付

一 小笠原図書頭様 思召有之御役 御免 大坂表ニ 御出帆 一通り達候 六月十七日

一 同様之面々十三候　鈴木宗榮より承ル

加賀中納言
南部美濃守
丹波左京大夫
南部遠江守
溝口主膳正
〔　〕井〔　〕登守

上杉弾正大弼
佐竹右京大夫
津軽越中守
松平飛騨守
御名
〔　〕左京亮

一 閣老小笠原〔　〕……任シ奉りし

所司代一〔　〕……

一 昨日〔　〕……償金之四討て

数寄を江戸を今……

四役〔　〕……桜子更ニ

相分不了〔　〕……弟孫ね

一 去ル十三日〔　〕……

濱御庭〔　〕……一日一

右之通 公義ニ 仰出并同様施行同日夕八ツ時〔　〕 還御

十三日御参内軍艦ニ而御出帆〔　〕三日〔　〕同日御城

一 公方様去ル三日当地御着 御参内 同日〔　〕同九日二条

御〔　〕大坂表ニ 御〔　〕……

〔　〕 御出〔　〕表 御〔　〕日〔　〕……

〔　〕一〔　〕ハ〔　〕 六月十四日

右之通 〔　〕 御〔　〕……

一 小笠原図書頭〔　〕 〔　〕大坂表ニ〔　〕

一〔　〕 六月十七日

洛中侍者
停止也
仰出ル

○永寧
官位ニ為上
入道永熱者
為後侍為上
情
情

九條入道前関白
久我入道内大臣
千種入道前中将
岩倉入道前中将
姉小路前中務少輔
藤　式部
押小路　大和局
千種　少将
坊城大納言
庭（二上庭）　嘴（頼）大納言
押小路

官位為上者為
有何中
細言上
岩和
男ニ為
左口侍（熱宮之上入道）
男ニ為
左口侍
岩和ニ侍ハ後ハ
諸道ニ成ル事

九條殿中来
山本外記
永寧ニ能
有本内匠
中務少輔父
姉小路二位
岩倉大夫
岩倉中将
千種中将
姉小路中務少輔
中将内侍局
堀川後内侍局
中山大納言

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

一云右一條何故歟一向彩不申以或説ニ
中川宮様を　大君ニ故島津三郎を
将軍ニ致し所工ニ以堂有ニ様子定ニ其
企ニ與ハもの歟ニ了ハ

ニ人ニ
後賢辞支
勅ニ右
永勅ニ右
ニ右ニ

一　正親町三條大納言
久我大納言
堀川侍従ニ
權典侍ノ局
山本左衛門
一土佐大夫

○青朔日浪士之頭　侍三人　徒士三人　位ニ近衛殿ニ　鷹司カ　長越帰ニ節途中ニ於ニ今津ニ
来與力同心ニ被召捕候ニ以味ニ及ニ迫ニ悪業皆彼ノ仕業ニ連判帳所
持長在ハ付引上即刻今津侯一河原ニ殿ニ長越ニ追出ニ成ハ為ニ其ニ
家横瀬ニ居ニ成長越ニ二日今津侯俄ニ御条　内ニ能勅使鷹司様
坊城殿始メ十三ヶ所ニ和ニ　仰付ニ于後大坂ニ同付不追ニ一河原ニ殿ニ相越即
刻関東ニ長下ハ也ニ後者ニ長谷川勢ニ居候ハ大坂ノ播州浦迫
長越ハ也ニ居ニ于後ニ大坂ノ北野和泉守ニ上京ニ何事　公方様此表ニ

ニ長越度ニ内ニ意ニ也　勅使公ニ而ノ事前ニ乱ニ之ニ接続ニ也ニ居ニ蔵
所ニ浪士ニ召捕ハ者連判帳之内薩州長州ニ家老同意ニ者ニ由ニ付
此ニ内乱ニ基ニ在ニ　亥六月

○六月十八日於　宮中ニ取ニ下ケ条ニ家ニ取ハ者ニ入ニ居ニ　津田留守所写也
先達ニ　公方様ニ浪士ニ中ニ京都ニ　勅使劫此条ニ宮相ニ偽行様ニ
派ニ大坂表ニ下ハ所ニ町ニ行ニ候ニ居ニ　御所ニ居ニ二男ニ云
大内蓄浅倉　幸治郎厄介　致ニ年ニ出来ニ未ニ成近年殊ニ有ニ立身ニ者ニ也　網ニ来也
ニ居ニ以下し　去十四五日　此十一日ニ　○右ニ説ハ陸小林氏林家ニ出ニ時ニ噺ニ者ニ有ニ事ニ居ニ
宣説ニ也

いろは短哥
知ぬ佛　親王　徐ハいるもの　和宮　諭より諸抜　水前
目ノ上ニ如　一橋　陸ニ如神ニ　紀州　亭主の好る　板国
赤石目し

所ニ御隠して
風隠さしに　水和　老て法子
コ隠ひ　小佐
泣て蜂かさに　あ封　家の為大
坂の夢　酒宮
能ある鷹ハ仇
をかくす　佐信　ありもてりし
思ひハ光る　水之
御上洛ありて見れハ御落城

○六月八日　同小納言
戸川健之印　鉾
同日付

右お茶部に　仰付ニ
大日付　五月十二日　長岡ありて
長岡ありて　大久保豊後守
右新大坂に　仰付ニ

六月十六日　病ニ来ル付頼之通同役　御免
同小性　内藤主馬守　関口能登守　仰同日向守
陸軍奉行　土井大隅守
石川備後守

○一　去ル三日為同帳　同系
内ニ為済同九日二條
御発駕大坂表ニ
立寄夫ハ東海道
ニ還御ニ於ケ
ニ仰出ハ為同鉄
水ニ鉄ハ使ニ先
出於蹴踏ニ為調置
来ル
公方様御軍艦ニ
御同様ニ於ケ満
誥同格老中若年
寄殿中諸合ニ而
ニ御詰内通御
ニ為ヘ長出同日
見ニ御本海ニ
様ニ於申上ニ於
席ニ謁老中
一御座ニ水戸殿
一格中納言右同
所ニ付日参ニ
同對顔

十六日

茅井茅狭守
同小納言　内
永井外記　門奈寛之助
大河内革印　井上助事
河風帯刀　瀧川三九郎
小林相之助　丞
右同役　御免勤仕兼ニ　仰付ニ

○大月付ニ
牧野伯家ニ内新之頼も有ニ仰付同役　御免ハ前ニ帝鑑之間席
ニ　仰付　稲葉長門ニ所司代ニ　仰付ニ
右之通去ル十一日於大坂表ニ　仰出ハ此段向ニ一ツ達ハ六月

○六月十八日　還御ニ付通出ニ付有ニ

先志諸之通　進
多加賀内　外
大久保新出大夫ニ　相手　忠
永井相守ニ　ニ本弥兵衛

加判列上座ニ　仰付テ　御座間

酒井雅楽頭

牧野備前守様　松平[illegible]守様

保科様　遠山[illegible]様

○六月十八日　急用ノ条ニ付　仙台様　土佐様

仰出サレ候

○御落飾ニ付ノ儀ニ付　[illegible]ヨリ御達ニ付　別紙ノ通　[illegible]

急用ニ付人馬遣ス[illegible]

[illegible]

右ニ[illegible]　六月

○[illegible]

右[illegible]　人数　[illegible]

[illegible]　[illegible]人　[illegible]

○閣老松山侯辞職事

今般[illegible]

[illegible]

[illegible]

御役御辞退書写

私儀[illegible]

台命不了辞避鞠躬尽力[illegible]

命[illegible]

天恩　幕威海内ニ敷及度了日夜焦心[illegible]

甚々中ニ而當今ニ至テハ要務刻々差迫候ニ付唯今攘夷之
勅命ニ随ヒ上ヲ尊ミ国是ヲ相定メ候様右件奉在京中ニ申上候右　御趣意相貫候様ニと
存込罷在候処今般　還御之上群議承リ候處と実ニ当方今之形勢五ケ国之拒絶
三港相鎖候事ハ迚モ難被仰出候ニ付趣意相立兼候一ケ所成行然様之
勅命　御遵奉之廉相立候様仕度与心配仕候處其内中之議相定兼候内ニ御座
全躰前後之形勢ニ相成候ニ付其心得之通ニ而此段遠
上京　御無理ニ何ニても了然
廃置候ニ付自然是迄只管攘夷之　御趣意相立候ニ至り
粟升仕候事全ク不相立依而奉職之状之有之候天下大任
ニ為一所謂恃蛇画蛇之一貫路ヲ始向後之形勢御大事ヲ誤リ候
等之儀ニ御座候戦慄恐惶寝食ヲ不安候事ニ御座候付上之
御役御免ニ被成下度右奉職之状之罪ヲ被仰付度一己之安逸と
求メ候存意ハ無之候御免ニ被下候任
ニ仕付候粉骨碎身累代之御高恩ヲ奉報心底ニ候得共何卒臣之
御衷中御備案之御免之上此段
不悪御評議被下候様奉願候　以上

六月十九日

板倉周防守

酒井雅楽頭殿

松平豊前守殿

水野和泉守殿

井上河内守殿

○彦根侯へ

掃部頭殿ハ大坂表ヘ出張被仰付戦争之上一旦退所之敗ニ及候

備前岡山藩
土肥典膳富家
野呂久左衛門
文三十五年

其方伊大庭恭平 師岡カ 岡元太郎富田由大郎中島永吉寄合尊王之名義ヲ假洛西等
持院ヘ踏込足利三将軍木像之首抜取梟首可致積リ逆臣巨魁之趣書顕
し板札を取扱ひ次第ニ而当中ヘ不存其般宅後元太郎ニ梟首臺取扱ヘ
居ルを見請企ル様子ヲ承敢ニ異見をも不加其上恭平外七人右木像首位牌
并不容易種々之雑言認入ト板札をも持越恭平之外永吉元太郎並同居ニ而致居ト
山田徳太夫倶々持出ルを差留も不致傍観罷在既々三条河原ニ而ニ梟首体々
此次第関係ニ不致其元太郎ニ支配下徳太夫ハ同居之者ニ多重役も相勤ト身分右
始末別ニ不届ニ付中追放申付当分小笠原左衛門佐家来ニ預ケ引渡ス

六月廿三日

右於ニ少郎所ニ行徳川橋慶喜ヲ了渡ス

文久三亥年十月

○長州赤間関辺ニ而佛蘭西和蘭ノ両国軍艦ヲ長州家ニ而打ル其説如何哉

日本大恥長州私ニ艘ハ佛蘭西ニ打タタカレ其艘ハ下より穴ヲアケラレ貳艘共サシ
人数九百人程海ヘシツミ佛蘭西之方ヘ去玉其ノ為ノ人数五六人即死之由

姉小路三位中納言殿京都ヘ天下を引度望之由如何哉

答此事之此表ニ而ニ風聞ニ而ニ

薩州長州右同断

右同断

長州前書之事ニ而此節ニ三モノグルイニテ豊前小倉城主小笠原大膳大夫様ヘ此人数ニ頼
度也長州ニ相頼ル處ニ用ヘ無之也ニ付長州軍勢小倉城下ヘ大勢ニ而ノツトリ此ニ而ニ
又小笠原ニ而ハ一向ニ内ヘ不申也如何共致し此ニ而ニ計リ居ル由此後ニ密ニ此遊
公義ニ而も御相談ニ而ニ伊ニ

作出ルニ而ニ皆ニ了居

六月十六日

○一 公方様御軍船ニ御帰城ニ遊ル渦誥同格老中若年寄始殿中誥合之面ニ

御城内 通御前ニ蒞出 御目見 還御相済ニ登 城内悦ノ上於席ニ謁老中

但可泉十六日浅草観音ニ参詣両國ニ象之見世物 丈七尺程頭ニ尾迄凡八尺位薄黒色耳こふもりの如く口ハ黒ク大く

く凡形ニ牛ニ似鼻凡四尺程ニ至ル自由ニ之ヲ巻ハ寸ニ杯鼻先ニ巻ハ寸ニ杯ニ至ル手ニ似く如く目小ク至ル程也 見物いつて蔵家通り浅草

境内昔と替り奥山之風景廣く見せ物茶店寄場ニ外桂木屋軒を並へ賑ニ致

ル且象色目を驚し見物之内「カメル」本邦馬ニ相成形ニ首長サ四尺程有之距馬の如く頭ニ尾迄八尺程有之脊ニ左右ニ多れみの如く

足の付根ニ大ニ凡毛蓑の如く尾ハ馬ニ似て短く凡二ツニ分れ麻ニ似て栃栗毛ニ云歯ハ犬の如し 生人形種ニ之形ちを作りゆゑ生人ニ如し

中外見通り角八ツ之潼ニ打ゆゑ帰路蔵家ニ浅草ニ出つを入横山丁浅草油丁田所

丁小網丁ゆゑ橋をも前ニ投引半天陸等之人十人計住来之人を拂ひ何

心なく無り前ニ人拂ひ有ニ戻り成ルヲ又何度ニ拂ハ解兼ゆゑ何後ゆゑ

官ニ此口ニ今濱御屋ニ 御茶船ニ 還御ニ御ニ帰ル思ひをなきこそ及ぶき

早ニ御ゆゑ橋を渡り本船丁目本橋ニ出り此木戸ニ、、を乂滞りて通しゆゑ通り接け

一石橋ニ合川岸ニ見せ云家ゆゑ形ニ先周りゆゑ暫ニ内先主呉ニ橋相頼ニ此亭

ニ至ル仕ゆゑ去帯力ニ隠し一ツ下ニ至ル又ニ高如房ニ頭ニ此押入ニ仕廻川岸土蔵物並

ニ合六尺位宛明ニ居ル合ニ御船ニ通りゆゑ見つゆゑ軒下ニ平伏亭ニ一同拝し此来ニ

御船ニ御先箱三ツ御具足櫃二ツ御長柄ニ御道ニ有之二三十人ニ家居ニ同

御船 御茶船ニ御ニ屋根船五六艘右ニ 還御相済ゆゑ余ニ御ニ輕ニ

凡四半時計ニ相済ゆゑ 御座船ニ拝し得ニ御ニ多勢ニ内

先別一向無之亭ニ咄しニ今日 還御ニ御ニ事ニ居ル御川岸掃除一段繋ニ至ル船

ニ有之ニ及首ニ所流し有之ニ御ニ御ニ御ニ類式 御成ニ見張ニ夜ニ

ニ至ル時ニ恒度難有ニ者之ニ亭ニ亭ニ礼を述ル

但御座ニ夜ニ帰り御前ニ居之咄ニ内今朝 六月十六日 二ノ御臺場ニ蒸気船ニ

御上り小船ニ御濱御殿ニ着 入夫ハ御素船一石橋ハ御上りニ御屋出し
ニ内実ニ御濱ハ御素切御供御側衆達ニ御留メ下ニ御又入ニ
内御素出しニ遊ハ御手何ニ御ニ御ニ繋ニ御四疋牽出し御御
續ニ本挽丁ハ五丁目横町布代衣屋見せ前通り八宮丁ハ數奇屋橋御門ハ
河岸通り呉服橋ハ辰之口大ノ手御門ハ 還御ニ相成只五殿ニ御供
續ニ御ニ御跡ハ汗を流し 延年ノ御内

御法御書 六月廿四日

寺社奉行

御座所 堀大和守

同 廿六日

願之通 右京亮俊寿ニ御
仰付 當近之通學問所ニ御相勤ト

秋月長門守

同 右京亮

同 廿七日

年来厚存之ニ御ニ有之ニ御ニ付
四名を以ニ年ニ寄万儀ニ申ニ

松平左兵衛督

六月廿二日 御法書

大番頭 堀田加賀守ニ御

同留守居 堀田越前守ニ御

歩兵奉行

西丸同留守居

新番頭 三好山城守ニ御

諸民所頭 ニ

右同前ニ御ニ付ニ

同敬言衛向市中同丸御

立花出雲守

同寺院奉行

久ニ水石見守

諸民所砲術師範役

下ニ根甲斐守

新番頭 三好山城守

同目付 堀宮内

川村順之助

大目付 松平對馬守

同 長崎ニ御ニ 大久保忠ニ御守

町奉行 ニ

同 新藤兼守

同用度報告
仰付之

去九十九日之内

大坂表同敬言衛並同屋場纂之海軍所同之建物同用之事
一の改用之事
六月廿四日
西丸同為書
[illegible]
同月付
同使也
和田傳[illegible]

同[illegible]
川[illegible]
同[illegible]
[illegible]
同月付
大井[illegible]
ち[illegible]
設樂[illegible]
同月付
成瀬[illegible]

○新両替町ニ張被置ト文書ニ答
新両替町ニ張被置ト一書披見ニ所足下何人なるや　皇大國忠士ト稱其度
英國ニ金を渡せしを國辱とせれば是ハ微ニ小ニ足下ハ如き微心ニ至る貴ニ
と思ふへけれども錢ニ寄事ニ臨ニ金銀を土芥の如しさるを何ぞや國辱とせん只夷賊の望
ニ應ずるの所憤怒なきふしにあらねども此度君ひされハ大謀を乱る如何せん時宜ニ隨ふの筭策
とし松平豊前守度ハ忠誠温厚の君井上河内守度ハ正実平和の君惟是時勢を量るのニ攘夷ハ
落ち降様慶喜之足下ニ意金銀を渡せしを國辱として今我邦士民ハ離人心不和なるせ此辱
とせざるハ小辱を知て大辱を知らず足下嶋山九郎秋龍と記せど今天下ニ知る人なし是極て意名
なる處しまた称ニ至之人生國ニ所ニ住所ニ所ニ足下天下の為ニ誠の忠臣なるハ性名を正
愛して其堂を卒ひ政府ニ出て存意を与へし其論至誠至當ニ於て其征府ハ勿倫天地神明
なとも容れ玉ハさらん性名を變し街頭ニ張れして人心を惑ハし自分忠士と称せれば実ハ天

下の奸賊之党たるの足下迄ハ限らす近来自ら報國者同志と称するもの専ら攘夷を唱ふ其実
ハ合戦之利害軍略の次第もなく報國攘夷と計り申触するの一図合点ニ行すれハ予是を云
しむるハ小児の戯とし抑　皇國の人三尺の童子といへとも此夷賊の跋扈を憎さるものなし
されハとて一端宋落者之上ハ當今之法ニ打拂之理なり　夫合戦の道は勝敗を機先ニ詳し
必勝の理を見て兵を遣る其上にも兵を練り粮を貯へ時を量るを良将とす彼を知り己
を知れハ必勝彼を知れとも己を知らされハ勝敗半す彼を知らす己を知らされハ完敗を今
我邦人心紛々として和せん天下悉く危く疑を懐し此時ニ當りて兵端を披く事は彼ニ十分
之利ありて我ニ一分之利なしとて頭無なり党ホ之利害も惜らすして年体に攘夷を唱る
ハ一命をすて淵ニ臨むニ等し　嗚呼愚之甚敷なる論なりと言るへし婦女子といへとも察知
すへき所也又諸浪士京師を始近之乱妨狼藉これ何ぞ不届ぞや先年　水之浪士井伊
掃部頭殿を討ツ掃部頭殿を悪むといへとも其実　皇國之功臣之其人の權を剖りて予足

へし其宗をして疵を掌しむるハ不仁ニして且宗国之功業を補翼せし功義を戻るへし
其輩之生命を捨るの賞を得るとすれハ忠義ともいはるへけれとも天下之政務を犯せし逆
賊の名を遁れ得し命を軽く捨るとすれハ掃部頭殿の權を剖るの手段を為し乃至へ
きにあらすつる命を失ひしハ悪の致す所之憎むへし惜むへし死する者罪なくして罪
なし増むへき其當之為ニ時を逝去せしを備るとのす其後後藤未練の罪人
之党ありて浪人共ニ千流主を招攘夷報国を名儀して押借りを始め其他悪業言
語同断之去ル両年東禅寺ニ乱入又ハ横濱ニ討入んとの企これ何之頑愚ぞや假令
横濱ニ切入夷人を殺し討ちとるとも夷賊を退治し遂るや千仇を報ん為冬ニ軍
船数艘を向へ必然之千戈ニ至りて彼等の為にて接戦可成也俗ニ藪を突て蛇を出
す諺之水戸前中納言殿を報国有志之棟梁と崇め其逆志を継しむるの名説とて
其先年夷賊渡来之職掌を営まれさる　伊豆守殿を免ぜられし八全攘夷の

思召のこと何ぞぬ顔無なり夫を烈公攘夷ニ思召とのこと言ハ却ニ烈公をして表裏之
人ニなれるもの且何人の推挙なるや烈公亜相追贈さる予を以言へハ恐烈公追贈の
當る所何の所ニ是を別るゝ功天下ニ及ぶ義なし況其治國を論ずるものと攘夷
を唱ふものと二派ニ分きて國政を乱る又西國の諸侯と唱ふる者二派ニ分る水為を始と
して一藩さへ治らざる形勢を以各國ニ向ひ闘戦勝利あるとも實へ乎浪人乎只烈公
の遺志とするを口実として天下を動揺るさしせるのこと其今政府の御用人多き中
ニ新徴組ニ於て以後我を蒙り御実として何ゝ用ニも立す御府の賊を貰す
のこと実ニ報國有志なるハ各ゝ其身を保ち第一のこと為ニ千載る期ニ係る忠義
をいふへし早竟身の窓れ如なき所ニ報國ニ若義を偽りて口腹を養ふの術之
ぬ所の黨ハ幾千人ある内さへの所ニ以用ニ立ものゝ所ニ付ふす　天朝ハ至尚すなり
至而當るの　御身ニ為ニ下情ニ其跡なり跡成ニ依ニ傍肝ニ欺られるゝ恐多

くも奸人ハ其所を以て御府を詭し　朝廷ニ媚を執烈公を楯ニ有り
朝廷ニ忠義を擬して　敵慮をも欺倍臣卑賤ニ所至近も　敵慮と
なし人心を動揺さするの悪謀言語同断之御　東照神宮御創業以来
二百有余年天下の御政体関東ニ出来候なり天下の為ニ至論有しハ征
府ニ於て可申上ニ征府を差置　朝廷ニ申ハ実ニ　公義ニ御間を隔る奸賊之
仮令　敵慮ニ有せよ悪しき事ハ征府ニ出来候用ゆゑ是定　敵慮ニ背く
ニあらず　敵慮とて悪しきを示さハ臣として君の悪しきを天下ニ觸るゝの理なし
れハ臣ニ為ニ忍ひさる所也近来の如く頼ニ愛至りて　天威も下ると先全
く姦人悪徒の為ニ所ニ出て足下ニ如き同列ニ徒なり　天威下れハ国威も下るハ
一体ニ成りて我邦の威を下し我国を乱るハ是則夷賊ニ加勢をなす
賊之金銀を渡せし小事ニ我邦ニ大害を醸すとの怪言を考へし又足下

天誅ニ代リ　政府ニ於役人と言ふ是何ニ叛逆ニ至ル天下くも　東照神宮
御創業以来二百有余年　御恩澤ニ浴せさるものなし自分有志ニ
称するものすら其言実なりハ已しく　御廣齋たる
政府ニ對し乱妨狼藉なくても實ニ嗚呼言行不同の乱人なるに足ら
ハ予ハ見るに依るに足下ニ云ふ所一ツとして取るに足ふ足下の言ハ
禽獸の論なり予云足下則禽獸と其謂如何となきハ　皇國に生れて
皇國に仇す是則人面獸心なり我く悔先非自殺をなり必しも
日本の刀を穢なれハ只縊死すへし依る答書如件
亥六月　皇國第一ノ不忠　不肖者某
島山九郎原ニ

○此節世上ニ形勢見聞仕ハ次第申上ハ相計仰候極密其向ニ漸ハ幾左ニ申上候
此度西州北ニ於大名横ハ相談ハ座ハ由ニ被為　君ハ御趣意多分ハ攘夷一条ニ奇
有之旨右者　將軍家兼る攘夷屹与御請ニ遊ハ而　御協府ニハ得ル
此節急速攘夷与申候ハ次而御出来被成兼ハ形勢ニ付東國ハ大名横方ニ
ハ相談ニ成右ハ答振を以尚亦　京師ニ　御奏聞ニ相成ハ積与被察候
又外ニ一ヶ條者ハ程越前家ニ隣國ハ演侯ニ使者正副使三人被差遣ハ口上
京都ニ而ニ攘夷ニ至切迫ニ被　仰出ハ得共越前一家ニ而ハ此上
幕府命ニ於攘夷ハ御受不仕ト心得右ニ付ハ隣國ニ至天下為ニ交
誼を厚く致し申度此上當時變ニ依リハ相談一の段ハ間兼ハ心得ニ下
度ハ与申越ニハ申述右ハ使者ハ御城下ニ二日滞留ニ加州ニ居越ハ旨ニ
出ニ致し候　是ハ御当主ハ口上ニ御座ニ春嶽横ニ而ハ間ニ
ハ差上よしハ而同人横ニ先日ハ横ハ免有之　公辺此度ニ御召一條

も右ホも一の有て我々由京師此節兎角不穏次第ニ有て薩州与長州与近頃
大不和ニ而然心敵与相成ト由右ハ近ニ風説も有て如く　青蓮院宮御大望有
て今薩勿ニ而取立致し中川ニ而住居出来中川ノ宮与申ニ萬端遵奉ニ如
宮も先頃中　當今ニ御不興ニ而　御条内も無て就ち万事
遠背ニ姿ニ而島津三郎殿俄ニ開国聞港ニ説を立ル国有て自国ニ而ハ
英国与交易ニ談合も致し生変村一件贖金二十万両も可出旨ニ而和談相
済ニ由右次第ニ付ハ兼ニ国事ニ織り三條殿始拾三卿与ハ殊ニ外不和ニ相成
浪人共も望を失三郎在京ニ候得ニ打死ニ而苦なと申唱ニ始末も有之
長ニ而ハ薩ニ賣られて腹立致し居ル田無ニ所五月ニ六日ニ長州与
夷船与の争戦風説ニ通長州大敗軍始ニ目を覚し由　此後ニ長州ニ而
ニ越ハ家老毛
利あ方ホ心得違ニ而無益ニ争戦を相始能々万ニ黙数死失も有て御国家ニ為ニ全耻
厚を取り恐入ト言私共父子当国ニ而ふ行而家老共ニ而ハ仰付ニ有ニ上ニ而ハ今ニ仰付ニ
ニ而ハ

右争戦後竊ニ小舟を以夷船ニ申込贖金ハ何程も可差遣ニ而ハ業ニ以免し
呉ニ相ニ与誤り乃ニ由夷人方ニ而も此上下関通航ニ節不意ニ打砲ニ不致ニ而ハ子細無ニ今相答
ニ由薩長ニ右ニ次第ニ而薩ハ姉小路殿を殺害一件ニ付洛中ニ薩人ニ人も無ニ置ニ而ハ相
成ニ被仰渡且薩人を召捕ニ而も會津藩ニ付薩人ニ恨居ニ依ニ不意ニ押出し會
津藩ニ敵對致し一のうも難量ニ左ニ付ニ争乱息ニ無ニ而ハ武又會津藩ハ
京師ニ守護与申ニ内実ハ関東方ニ付国事ニ至り公卿ニ而ハ右ニ話ニ此ニ味有ニ此
上ニ第ニ一會津家　御守護　御免長州ニ而　仰付ニ而ハ有ニ有ニ
弥薩ニ而ハ合ニ及一のうも左ニ付ニ実ニ大乱ニ而相成中国九州ニ而御領貳百万
石程ニ見捨ものニ上ニ而ハ可ニ求ニ其危ニ而無ニ長州ニ此度詰夷与打
合大ニ覚ニ有ニ而ハ有ニ如ニ右ニ仰出ハ有ニ間布　将軍家ニも今五六十日
御在京ニ被成ニ而ハ得ハ右ニ混雑も何とか取鎮ニ而有之右　御在京を被仰上ハ板倉候与ハ目

板倉閣老御役御免
小笠原図書頭殿
御役御免

付設楽弾正様御小納戸頭取粕屋某計り餘ハ皆一日も早く　御陶府ら申御取識ニて御所ニて罷成候由設楽様西
丸御留守居粕屋様洋学所頭取ニ転役板倉侯御引込も右之次第ゟ申立候由先ツ此節ハ御引込ニ遊候様ニ与
申居候　京師混雑一条　天子ハ能善悪御了解ニ被遊候得共中川宮口出し相成兼ハ勢ニて万一御口出し有之
候得ハ往々御食物も御油断成り兼候程ニ可相成様子ニ而御憂苦中之由右ニ付次第故哉御老若並諸役人衆
御引取いつも夜ニ入又ハ夜半ニ帰候由長州諸夷と争戦ニ砲発之事ニ御座候京都を御発足之処　禁裡ゟ長州ハ
攘夷之　勅旨有之無餘儀上下八百人計人数出有之亀井侯ニ而も御同様　勅旨ニ付早々築立長州与御同
意ニ付長州ゟ頼ニ付二三百人出候由御座候所右問ニ合不申争戦ニ不致与ア噂之由小倉薩州侯ハ長州
ニ撰兵を乞候得共関東ゟ御下知無之ニハ兵出兼候由断ニ而一向ニ人数不差出候由是ハ大ニ出来不申ある
右之次第ニ付御申上候　猶又虚実之義相分り不申候　事情御推覧一ツ之ミニ御座候
此段申上候以上
六月廿七日
小林柔介

七月二日石新氏話
○残暑強く候故哉御老若兎角御不快之方御多分御用談も御簾ニ参哉　六月廿七八日頃之事
一　此間松平豊前守殿御用番中八日も御登城無之御用済候事ゟ一向ニ
一　不快ニ付御登城無之御鷲気ニ而登城一ツ有之候ニ付御快細ニ而登城之由
一　御老中口迄御鷲気ニ而御出仕有之候処を倒レ候ニ付諸御役人方御用談ニ不快又
一　之内御箇之節ハ御中之口迄御鷲気之出仕之者之相成ニ勢節之形勢ニ思
一　以御之事又々御さしとも御思召ある事ニ可有之し
○大坂ニ而御加番初諸組陪臣迄被仰付古日割
日割之覚
鎗術　一六　諸組　与力　同心　陪臣
但　東西御番方御警衛之御番方当分組入
四九　東西大御番方御警衛御番方

但右借道具ニて當分劔術諸向出席

劔術　二七　諸組与力同心

三八　東西大御番方　御警衛之御番方

五十　陪臣

筋違御門鎗劔稽古場規則

一 鎗劔之朝四時拍子木を打稽古相始メ夕七時拍子木を打稽古相仕舞

但暁氣到夏節之朝稽古六半時ゟ四時迄

一 稽古始メ正月十八日稽古納メ十二月十八日

但稽古始日割を初日を稽古始とも定稽古納も同断之事

一 五節句八朔　七月十三日ゟ同十六日迄稽古休之事

亥六月

今般中納言殿早〻可致出府旨被 仰出、不日可致發途、私先年御無

拠頼ゟ中殿御年少之處先比節從暑も強別而難義仕候付中納言

之内用捨相願為名代同氏筑後守出府之儀一同願置候処私同人儀

御用有之出府之儀被 仰出候同人ゟ名代出府可仕旨今般出立

為致ト出限前ゟ御用急ニ伺人無之ニ付出府仕先共人之儀筑後守出立

候得共ハ恐入候ニ付此段ゟ上申候様ニ被成候以上

七月四日

加賀中納言内

今般御達之義ニ付

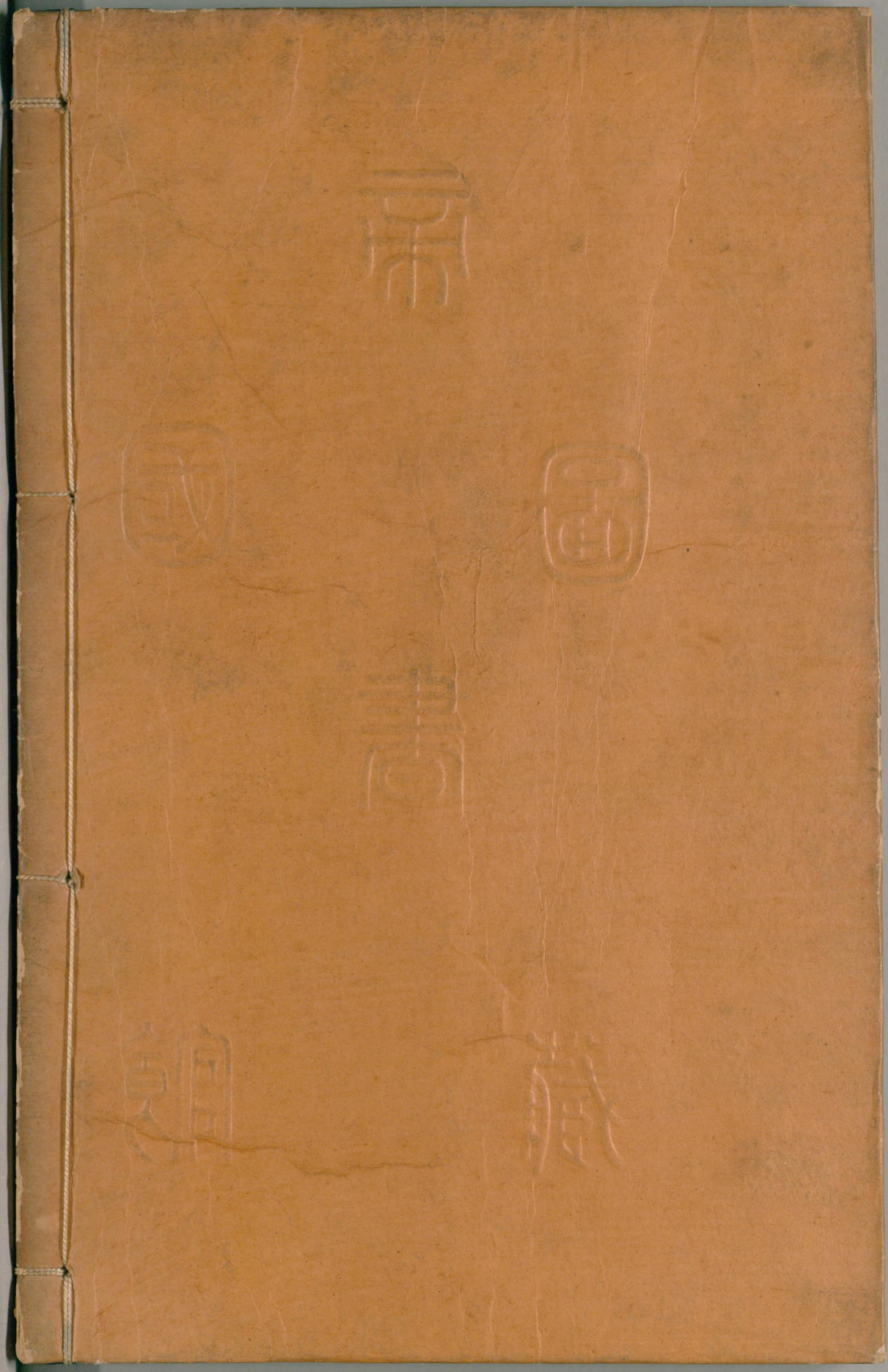
禁裡御所為御守衛敦中守富来小坂大八〻〻の始終今五千

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　　ガラス使用

836
209
3

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3

ガラス使用